

*The Fulbrighter in Nagoya* No.27

*The Fulbrighter*  
*in*  
*Nagoya*

No.27

Nagoya Fulbright Association

January 2018

Nagoya Fulbright Association

## *The Fulbrighter In Nagoya No.27*

### 目 次

第1章：加瀬豊司（Toyoshi Kase,Ph.D.）四国学院大学名誉教授（1974－76）

エッセイ/ essay フルブライト顛末記：悲喜こもごも自分史の再想像

第2章：藤本博南山大学教授「ヴェトナム戦争の時代」と向き合ってきたこと

—トランプ政権発足後のアメリカの行方にも言及しながら—

第3章：川島正樹（南山大学アメリカ研究センター長）日本人歴史家が英語で米国概説史を出版する試み——22年間の個人的苦闘の軌跡と新たな研究課題への挑戦

4.会務報告

会則

役員名簿

## 第1章 〈エッセイ/essay〉 フルブライト顛末記：悲喜こもごも自分史の再想像

加瀬豊司 (Toyoshi Kase, Ph. D.) 四国学院大学名誉教授 (1974－76)

### ある市民感覚

名古屋の地下鉄に飛び乗って、ホッとするとすぐ“駆け込み乗車はやめてください”とよくお叱りがある。かつてアメリカでの研究で地下鉄（メトロ）でワシントン D.C. のアーカイブによく通った。半分閉まりかけのドアをすり抜けるようとする乗客を見るとアフリカン・アメリカンの男性が足を踏ん張り、両手で“グウッ”とドアを開き援助乗車が成功、そして周りから起こる拍手。こんな風景によくお目にかかったし、自分も一緒になって拍手の輪に加わる。研究活動に加えてできるだけアメリカの日常生活に“参加”し、生活感覚も共有してみたい、こんな“願い”がこの日のメトロの車中で果たされた。苦笑しながらの自己満足の一コマになった。

### essay とエッセイ

先日“essay”をと聞き、初めて留学した WSU (Washington State University) 時代の思い出が蘇り、何か複雑な思いがよぎった。外来語としての「エッセイ」は論文 (essay) とは違い、軽い気持ちで思うところを云々と受け取り、随筆調と論文調の間を行き来しながら綴ってみる事にした。アメリカという地域を「トポス」とし、意外性がもたらすハプニング、意図的にしたパフォーマンス、出来事としてのエピソード、そして失敗談等々について率直に当時の感情も交え、その心の実像を徒然なるままに描いてみた。“eventful”だった個人の物語の telling a tale と思って頂きたい。次世代の Fulbright・EWC 留学に何かの“telling”なききっかけの一つになればと願っている。内容はできるだけステレオタイプ的なものは避け、現場の意味 (situated and occasioned meaning) を探り“lived life”の中で自分も(再)感動をしたいと思っている。いつとき何食わぬ顔をして留学生活万般を楽しく過ごしたいと夢があった。しかしアカデミックの厳格な現実に驚き、体裁を取り繕うのは止めた。いろいろあるが、と涼しい顔をしてではなく、正直にその悲喜こもごもの事実と実感に突っ込んだ再現をしてみたいと考えている。フルブライト奨学生応募に始まり MA と Ph.D. の大学院生時代で感じた事、考えた事の中で、心と頭に残る印象や情緒を殺さないよう、新鮮な(再)認識を持ちたいのが今回の願いである。そしてこの事で「エクリチュール」の書く世界がつくる感動に浸ろうと今、密かに願っている。将来も。この意味では“The best has yet to come.”。今までフルブライトの体験は主にフルブライトの関係書誌にいろいろ掲載させて貰っているのが、重複は避けるよう努めるが、背景や続き具合の理由で一部の重複をお許しいただきたい。

### アメリカ研究

遡る事 1974 年、フルブライト大学院全額支給プログラムでワシントン州立大学 (WSU) 修

士課程 (English/American Studies : 所属研究科は文学、アメリカ文学に加えカリキュラム上は多くのアメリカ史を履修) に入学、2 年目にはここでの成績 (transcript) と書類審査を受け、学位取得まで更新が認められ、それまで滞在が可能になった。その頃、「アメリカン・スタディーズ」は文学の美的 (詩的) 価値 (aesthetic merit) と歴史の史実証性 (historical evidence) の間で広く “詩” と “史” の結合・融合といった (その美しい) 関係理念のスタイルを目指し、かつその理想に燃えていた。大学内の位置づけは、独立した学部化は理念の “自殺行為” であり自己矛盾に陥るので、制度上、例えば筆者の場合は、Dpt. of English に学籍は所属し、実際の授業は文学に加えて歴史、そして一部「アメリカン・スタディーズ」の理念と方法がそのカリキュラムの構成であった。教授陣は文学および歴史の学部・研究科 (Department) から出向の出前合同プログラムであった。

次の機会ではアメリカン・スタディーズとして独立した Department を持つ大学に勤務校のサバティカルで Ph.D. (American Studies) のフルタイム院生として (U of Md: The University of Maryland または UMCP: University of Maryland, College Park 本校) 入学した。(本音は Departmentalization をしないと予算もつかないし、助手・秘書もつかないし、独立した場所としてのオフィスもない、が関係者の現実の本音)。かつての WSU 時代は複数のオフィスを行き来していたが、U of Md では専属教授の研究室も同じ建物の中にあつたので小回りがきいた。制度上の議論とは別に、この頃学問的方向としての学際研究という言葉も定着し始め、二つ (もしくはそれ以上) の関係からなる interdisciplinary の関係性そのものに特化した方法論や目的論の多いカリキュラムが履修科目であった。時代的にアメリカン・スタディーズそのものとその方法論を巡る変遷を在籍中に経験する事になったし、今はごく自然に学際性 (interdisciplinarity) がライフワークになっている。(詳細は 2010 講演記録「アメリカの大学院教育」、*The Fulbrighter in Chubu*, No. 21 に)。

### doctorate と dramaturgy

博士論文 (dissertation) は日米関係史としての日系アメリカ人史に絞り込み、明治の移民史から太平洋戦争を経て今日に至る歴史をオーラル・ヒストリーの手法使って書き上げた。その後、その論文を基に出版『*Nisei Samurai in Washington, D.C. : Culture and Agency in Three Japanese American Lives*』邦題は『文化変容と人間行動—ワシントンの日系二世ライフヒストリーを通して—』をし、そしてそれを演劇化し、多くの演劇関係者の協力を得て一般公演 (地元名古屋で 8 回公演、観劇者延べ 2,000 人) に至った。さらにそれを体系化し、日本オーラル・ヒストリー学会で「認識の真実 : オーラル・ヒストリーの戯曲化」と題し、オーラル・ヒストリーの「作品化」の観点からの自由研究発表にも繋がった。(JOHA ニュースレター、第 28 号)。フルブライト留学からの日米関係を 40 年かけたアカデミズムとドラマティズムの展開は日系アメリカ史の “re” presentation の一つとしての舞台化であった。dramaturgy を使って history を story に、いわば歴史の文学化の営みと思っている。また博士論文での専門性と劇場での大衆性をモード変えたもう一つの関係性と理解

している。ドラマでは価値観や思想は人間の行き来で演じるので、日系人の生々しい生活感覚を板挟み状態での葛藤やカタルシスの揺れの中で representation する。勿論脚本や演出で“ドラマティック”な脚色はあるが、演劇は単なる演技ではなく本質のリアリティー (plausibility) と迫真性 (verisimilitude) を一途に追求し、人間の深い真実を掘り起こす営為なのである。ここで台本から実際のセリフの一部を引用してみる。アメリカの「強制収容所」(16 分の 1 日本人の血が入っていれば国籍に拘わらず強制移動) の中で、1943 年は一世の親と二世の息子の意見の違いが運命の違いになった年だった。亀裂が入るぎりぎりのところでの親子喧嘩の一コマ)：

**\*ボク、志願したい。俺あなたが戦う相手は日本よ。パパやママの祖国よ。そしてあなたも日本人なのよ。俺ボクはアメリカ人です。俺日本人だ。俺の祖国に弓を弾く事は許さん！**

**\*But, パパとママは確かに日本人。帰る祖国がある。俺でもボクの国はアメリカしかない。俺バカ！一生ここに住んでも、お前はアメリカ国籍の日本人だ。俺違う！一生ここに住むからアメリカ人。**

**\*収容所に連れて行かれた時、白人の牧師さんが言ってくれた事、ボク忘れない：「アメリカ人が日系人に対して今何をしているのか判かっていないのです」** 俺・・・それをあなたが分らせるのね。 俺Yes、それが二世の仕事。

**\*オレ達日系人のため捨て身の覚悟か。** 俺 (大きくうなずく) 俺そこまで思い詰めているのなら・・・(長い沈黙)。サムライらしく・・・恥ずかしくないように・・・戦って死んでこい。

**\*この子は新しい扉を叩こうとしているのですね。あなた (夫に)。**

語りのコロス：親子の本音のぶつかり合いの後、“ヤンキーさむらい”として(親子の“和解”)、そして息子は出征。わが子を見送った父親はその夜(祖国に刃を向けた裏切り者の親の故か)自殺。

太平洋の東と西で異なる戦争目的の中で、複雑な信念で生き抜いた日系アメリカ人達。生まれと育ちの複雑な関係からくるアイデンティティーの越えがたい溝。アメリカ社会の中で政治・宗教・教育思想一親世代の皇国思想と次世代のアメリカン・デモクラシー、神道と仏教とキリスト教、家庭教育と学校教育等々の多様な考えが交差している日系の“国際”社会。価値観の衝突に人種の違いからくる社会差別が複雑に絡み合う。舞台に響くジレンマの叫び：“国とは何か、国とは”。矛盾の中の和解は死という犠牲が付きものなのか。こんな葛藤を 70 年前の戦争という極限状態の中で生き抜いた日系人の人間模様を、現在、創る(作る)側と観る側の舞台上の“関係性”も念頭に置いた theatrical representation と受け止めている。人間と環境の綾なす社会・文化の価値観を重なり合わせる戯曲は、社会学者クリフォード・ギアツの「厚い記述」(thick description) に相通じる世界と思っている。文化の記述も人間の描写もその中に価値観が何層にも複雑に織り込まれているので、“厚い”語りが要請される。

今回の戯曲化のおおもとになっているオーラル・ヒストリーで数多くの取材（インタビュー）をした。それらの共通要素を体系化し、それらを総合的に纏めたら「過去を紡いで、現在の意味を創り、未来に投げかけていく」一本の大きな流れになった。“The nisei were invariably steeped in the past through issei parents, actively engaged in an assessment of the present, and inspiringly cast toward the future.”の時系列の“三位一体”関係を社会構築パラダイムとして理論化した。この人間概念は「文化変容の中での人間行動」を可能にする人間の human agency が根元の「動因」。ここで、この human agency に関わる三つの時制を同じ方向で文脈化している二人の社会学者（Mustafa Emirbayer & Ann Mische）の論文も併せて掲げてみる。“…as a capacity to contextualize past habits and future projects within the contingencies of the moment”。日系アメリカ人社会での「human agency model」の枠組みの展開については拙著 *Nisei Samurai* の邦文の序文を参照願いたい。話が固くなったので、次は学卒時代の職場生活に触れてみたい。単なる世間話に陥るのではなく、毎日の生活の中にこそ微妙に揺れ動く心理や複雑な価値観・価値志向が潜んでいるのが日常世界と思っている。人間の深層に“complex and poignant humanity”が潜んでいるのが真相と考えているから。

### フルブライト・プログラムに到達

日本での大学卒業後、愛知県立の定時制高校教諭として10年間英語を教えていた。昼間は政府の在外団体OTCA（海外技術協力事業団）の日英語の通訳もしていた。自動車・電気・鉄鋼・鋳造・鍍金・窯業・繊維・初生雛の鑑別等々、多岐にわたる技術分野で県下の事業所・会社に海外からの研修員に同行通訳がその仕事。研修員の希望にも応じ、日本でのホームステイの依頼や県外の研修旅行にも関わっていた。こんな国際交流から言葉や文化の「ズレ」や「アヤ」からくる誤解や理解の世界に強い関心を抱くようになった。通訳としてのお付き合いは英語が当たり前と強く意識していたが、海外からの研修員の多くは母語・母国語は英語ではない。英語は当然第二言語であった。そんな環境でいろいろな国際（流通）語としての“Englishes”に触れる機会となった。そして驚いた事は多くの研修員は英語を使う事に訛りがあっても、意見を述べる時は極めて積極的（aggressive）で堂々としている事だった。論理的に鋭い思考（英語の言語的特質の一部とも思っているが）で迫ってくる。そんな異文化の発想と発信に興味を持ち続けていたが、その価値観の生まれてくる背景には「暗黙の前提」（tacit assumption）が強烈に“根っこ”の部分にまさに抜きがたい事実として存在している事を、身をもって認識した。こんな経験をテーマに全国中・高教員スピーチ・コンテストにも参加し、当時の1960年代は異文化間コミュニケーションの話題が新鮮であった故か、それなりに何度も賞をもらった。

「文化」の話題に関するその後の日本の変化に少し話がとぶが、国の国際化の高まりに伴って、異文化の理解や異文化の分析（衝突も）が大きな話題になっていった。また「国際」という名称がつく大学や学部・学科が増加し、行政の方でも国際課、国際交流課等が誕生し、

時の話題にもなっていた。大学の関係機関の分類項目にも「文化関係学」と明確に、カテゴリーとして少しずつ定着するようになってきた。そんな中で「文化本質主義」vs「文化構築主義」も授業の概論科目で教えるキー・コンセプトにもなった。＜後述のワシントン D.C. の日立ビルでのこの二つの主義をタイトルにして講演をした。参加者は多方面からの多士済々（大使館・財務省・世銀・商社・商工会に加えて戦略国際問題研究所・先端防衛技術研究所等などの“シンクタンク”の頭脳集団）で多岐にわたる領域が存在したが、この文化“主義”論争のテーマの「根っこ」が共通する現代社会の思考の基礎という認識が会場で生まれ、大層熱の入った成熟した講演会になった＞。

話を留学以前に戻す。学卒の頃、言語に関わる異文化に関心が強まり、ハワイ大学 EWC の 18 か月のプログラムに 2 度応募した。初めは英語教育を応募の領域として書いた。英語力は基準を上回っていたが、教職経験は当時まだ 2 年間で“lack of experience”と書類選考で不合格（結果だけでなく理由が明記されていたので感動）。後 2 年程現場を経験し再度挑戦し、英語、書類（同じ領域で）、面接に合格した。そして後日、ハワイ大学の最終選考という名の確認はあるが 99%は OK と聞いた。またこの頃ベトナム戦争の北爆へのエスカレートのため全米の文教政策予算は大幅縮小の事も聞き、一抹の不安もあった。結局、結果はダメだった。また理由明記：今度は“Your proposed area of study is not our current interest.”＜だったら、一回目からの理由に、文化を念頭に置いてはいるものの応用言語学（英語教育は）お呼びではないと言って欲しかった！＞。

そこで山王グランド・ビルディングに相談に行った。その際、フルブライト・プログラムはどうかと勧められた。なんとなくフルブライトは学者を目指す超難関プログラムと聞いていたので自分には無理と思っていた。ともあれ EWC の隣の部屋にある Fulbright Office に行ってみた。そこで「American Studies」の領域はと勧められ、即、次年度、フルブライト試験の応募し、トーフルの英語試験、書類審査に合格した。＜1974 年、フルブライト受賞者数が日本全体で 36 名と過去一番少ない年度であったと後日知る＞。このフルブライト最終の面接試験は、他の人たちよりも面接時間が極端に長かったが、日英語の言語比較の話題や異文化間の問題点等で質疑応答の多くの時間があり、多くを問われ、多くを語った。ただアメリカ史＜当時不勉強＞についてかなり突っ込まれ、冷や汗ものであったと記憶している。結果、“最終”の最後の面接試験に合格し、全額支給の大学院プログラムで渡米する事になった。＜年月が経ってからであるが EWC と Fulbright のプログラムは同一年度でなければ、同一人物が合格したそれぞれのプログラムでアメリカに行ける事を知る。それなら EWC に再挑戦したかったが後のまつり。またフルブライト応募時に日本学術振興会（JSPS）の米国留学プログラムにも応募し、合格通知を貰った。ところがフルブライトの合格通知到着後 1 週間程して、当然のような書き出しで「貴殿はフルブライト・プログラムに合格しているので・・・」と取り消し便が届いた＞。

## 事前の研修と専門の方向

合格後のオリエンテーションは英語部門 TOEFL の結果で期間と研修先が決まっていた。選択した複数の大学のいいプレイスメントのため TOEFL を再受験した。そのスコアがオリエンテーションにも連動していた。当時 660 点 (highest obtainable score) 中 600 点を超えるとアリゾナ大学で 2 週間の最短期間になるので、4 週間のハワイ大学に行けるよう 590 点台あたりに留まるよう“作戦”上の解答をした（点数が低いと 6 週間の他大学に）。多人数、諸文化が多彩に交差するハワイに行きたかってくかつて EWC のハワイがダメだったのも大きな理由の一つ。当時こんな受験での“遊び”を楽しんでいた。

ハワイ大学の研修では各国から集まったフルブライター他 (JSPS の留学生も一緒だった) の代表にも選ばれ、異文化のざわめきの中で有意義な一か月を過ごす事ができた。オリエンテーション講義はアメリカの歴史と政治が中心であったが、まさにその時ウォーターゲートでの大統領弾劾が起き、アメリカ政治の現実を身近なところで経験した。余談になるが 1975 年のクリスマス休暇にメリーランド州在住の義姉を訪ねた際、D.C. の Watergate Building を見に行った。その言いようのない複雑怪奇の建物の外見に驚いた。セットバックが幾重にも重なり盗聴等も容易い雰囲気が漂っていた。もう一つの余談はハワイ大学での研修中の出来事であるが、ギリシャとトルコが敵同士で反目しあっている 1970 年代、ギリシャとトルコからのフルブライターが皆の前で「我々は友達同士である！」と泣きながら抱き合った姿に感銘を受けた。フルブライトの精神の一つである「敵意、反感のあるところにスケールのある人物交流」の実践を目の当たりに見た気がした。ハワイでの研修期間中にカワイ島にホームステイをした。日系アメリカ人二世の家庭であった。太平洋戦争時の苦しみを聞いたが、今は、二世の当時の夢、キャデラックに時代を象徴するかのように乗っていた。最終的に日系人の事が専門になったのも、生まれて初めてのホームステイが日系人宅であった関係からと、ここは後知恵で関連付けている。

## 最初のアメ리카本土

まずフルブライトでの大学院生の学業の現実とは当時 (1974-1976) を今振り返ってみても、文字通り苦学生だったと思っている。交通費、荷物の運送費、授業料、書籍代、生活費のすべてがカバーされていたので経済的には苦学ではなかったが、正規の大学院修士課程に入りフルタイムの学生として毎学期 3 単位の授業 4 科目履修 (語学研修科目は取っていない) は苦労の連続だった。ひたすら生きようというよりは、とにかく宿題の読書量 (reading assignment) には、何をどこまでいつまでと授業の計画付き) の恐怖は正規学生なら誰でも知っている (教科書、文献を積み上げると天井に届く)。 “essay” (1 科目がペーパー 30 枚程度の論文) 提出、試験 (blue book という青色の表装の小冊子に試験の答案を書く事さえ知らなかった!) は一定の時間内で薄い色のブルーブックに教室で書き (一部 take-home のかたちもあった)、これが登録科目の基本のコースワーク。そして課程修了前、総合領域からの 3 種類からなる合計 100 枚程度総合試験 (コンプ、comprehensive exam) と学位論文と



口頭試問 (oral exam)。痩せてやつれ、やつれはて、必死の生き延び方であった、と回顧している。初めての正規外国人学位取得留学生でスイスイ行ける人には本当に拍手喝采を心から送りたいが、筆者の場合は悪戦苦闘の学生生活。確かに毎日の講義英語の速さは少しずつ慣れてきたが、あの速いテンポでのディスカッションの“やり取り”には相当苦労した。しかし知的刺激が充満し、次回の授業へのやる気のマティベーションになるのも事実であった。



(ワシントン州立大学大学院生時代の写真、1975 年頃)

英語で多分アメリカ人に“勝てる”領域は文章ではなく語彙と捉え、英和辞典をばらばらではあるが受験勉強のつもりで時間を見つけては“愛読”した(日本で以前拾い読みで、訳語の広がりや意味が少しずつ変化していく事に興味を抱き、拾い読みではあるが全部読んだ事があった)。ある歴史の授業で教授が「外国人嫌い」は何とかというかとの問いを発した。誰も答えない。中くらいの声で「xenophobia」と答えた。アメリカの大学で初めて先生から言葉の一件で褒められた。授業後同じクラスの2、3人から「どうしてお前が知っているのだ」詰問された。「xenophilia」の反対と答えておいた。アメリカ人学生は流石アメリカ人で“phobia”と“philia”の対比で気が付いたようであった。“OK.”(口調はO-o-okay)でこの件は終わり。ただ授業の内容に関連した joke/humor が分からなくて初めの二つの学期

(semester) 中苦しんだ。ある歴史の授業でアメリカ現代史を受けていた時の事であった。50's-60's 初頭にアメリカ大統領の話になった。アメリカの画一主義 (decade of conformity) のマッカーシー時代に大統領が communism (red scare) を言い続けるので官僚が communist とはどういう人なのか、と尋ねた。それは人のものを取って返さない連中だ。それじゃアメリカの白人ですね、がそのやりとり。瞬間 Native American の歴史が脳裏をかすめ思わず、声を出して笑った。白人がほとんどを占める西部の大学クラスであった。誰も笑わない (笑えない) 雰囲気であった。やはり後でクラスの連中からチクリチクリがあった。当事者が本当に笑えないジョークが本当のジョークと分かったのはこの時だった。また競争者になると急に厳しくなる (特にマイノリティーに) のがアメリカの社会の実像と感じた。この WSU のアメリカ史の教授は U of Md で歴史の Ph. D. を取得し、筆者の修士時代のアドバイザーの一人だった。授業は歴史の一コマ一コマを演劇の舞台で演じるように歴史に登場する人物の“真似”をし、再現してくれるので、それが面白かった。WSU を U of Md を卒業後訪問した。同じ大学の出身になった事を非常に喜んでくれ、清々しい再会の sentimental journey になった。

WSU でのもう一つの感動は素晴らしいメインのアドバイザーに出会った事だった。イエール大出身、文学の Ph. D. で伝説にもなっている (legendary) の教授との評判であった。履修指導の時まず手始めに「哲学」の授業を取りなさいであった。驚いたことにそれが履修指導のほぼ“命令”だった。その時は正直に言って哲学 (philosophy) は複数の専門 (discipline) 間の結合に何か役に立つかもしれない程度の認識であったが、とりあえず受講する事にした。後の U of Md の博士論文での dissertation とその口頭試問の defence で哲学の素養の必要性を実感した。受講しておいてよかった。思索・考察・洞察力はこの時の哲学の授業で養われたといっても過言ではない。学際分野での「比較」の手法は哲学の背景がないと表層的なものに陥りやすいことを見越してのアドバイジングだったと感謝している。余談になるが哲学の二文字は日本語では堅い気がするが「～の哲学」と一般化したかたちが定着している。物事の根源に関わる事は哲学と思っている。また余談になるが、博士号の区分でなぜ「哲学分野」でなくても Doctor of Philosophy の称号 Ph. D. があるのは分かる気がする。この事は後述する。

## キッズの世界

唯一の例外 (期間限定の天真爛漫の留学時期) は、妻と 4 歳の娘と 2 歳の息子の子連れ学生で大学の家族住宅で生活した初めの (なにも現実の分かっていない) 1 週間だった。ワシントン州の夏は快適だし、巨大なスーパーで買い物をし、安くて旨いステーキをたらふく食べて、もうここは“天国”、そして無謀にもこのままいけると思い込んでいた。しかし子どもは子どもで、子どもの社会的差別を感じていた。下の息子は 2-4 歳だったので誰彼となく仲良く元気に遊んでいたが、上の娘とも子 (4-6 歳) は言葉がないと生活できない。英語がほとんどできなかった頃、幼稚園 (preschool) に行くのに近所の子がよく誘って面倒

を見てくれていた。アメリカ人のフレンドリーな性格は本当に感謝だった。ところがある程度言葉も分かりかけ、特に娘が幼稚園でよく絵を褒められ、貼り出されもした（日本の幼稚園児はマネが上手で絵は“上手”）頃の事である。ある時いつもの子と娘の“I’ m not your friend anymore.” ⇔ “I don’ t care.” のやり取りをたまたま聞いてしまった。その後一人で娘（とも子）は幼稚園に歩いて行っていたが、ある時妻が折り紙を教えに幼稚園に出向いた時、その子はすかさず妻に“I’ m Tomoko’ s best friend.” と自分を売り込む。ここが白人のおぞましい（sickening）ところ。しかし娘は父親同様アメリカが好きで AFS プログラムで（本人談：アメリカに“帰り”）ピッツバーグの高校を卒業、外国の高校を卒業した受験資格で日本の大学に。成人し今県庁国際課職員をし、特に英語圏の外国人（教）職員（ALT 等）に“他より沢山給料もらってるんだから、その分もっと働け”と“sense of fairness”の考えをうそぶいているようである。



（ワシントン州立大学大学院時代、妻、5 歳の娘、3 歳の息子の写真）

## 首都圏のアメリカ

ワシントン州の WSU が終了し、日本での公立高校教諭と私大教授時代を過ごし、再度アメリカでフルタイムの学生生活に戻る。場所は西海岸のワシントンから東海岸のワシントン

首都圏のメリーランド州で院生生活をする事になった。ここでもまたアメリカの高等教育のアカデミック世界の厳格性と厳密性で一層の苦勞をした。勿論回顧すれば、今は心地よく懷古の感情が勝っているが……。この U of Md での研究場所については、アメリカ地域研究の西から東への広がりとは地方と首都の地理的・地政的の拡がりも視野に入れた選択であった。ワシントン D.C. の面積は 10 マイル平方の小さな特別区であるが、その周辺のメリーランド州とバージニア州をワシントンの首都圏 (Greater Washington) と称している。大学の規模は WSU (学生総数: 2 万 3 千人) と U of Md (学生総数: 3 万 8 千人)、そして同じ州立大ではあったがアカデミックの要求水準が違っていた。通常、緊急以外は自然体が好きでそのように生活しているが、この事は無知という名の自然体であった。そして具体的な緊急事態が待っていたのだった。

自分の成績評価の予測については、WSU の最後の学期の頃は ABCDF の成績評価がある程度自分でも予測できるようになっていた。授業科目の水準を前の経験で、高を括っていた。U of Md で最初の学期、ある受講科目を時間的な事情もあり、ここは B ぐらいでいいかと思い、その線で授業最後の Term Paper を出した。返って来た成績を見て啞然。C だった。アメリカの大学院の正規課程では平均成績 (GPA: Grade Point Average) が B 以下になると (ちなみに大学は C 平均) 大学院正規課程から kick off! 次の半期 (semester) に絶対 A を取って平均を B にしないと……。ここでの A はどうしたら取れるのだろうか。WSU での A は見当がつくようになったし、それはそれなりに取って来た。しかし一つ評価グレードが高いここでは……。衝撃が走っているが自問自答している暇はなかった。もう必死。勿論 no weekend。車の運転は止め、妻が家と教室と図書館の送迎の“あっしーくん”だった。その運転は世界のメガポリスで“ガンガン”とベルトウェイ (D.C. 地区を囲む環状高速道路) を走り回り、自信をつけた運転技量。その向上を尻目に、こちらはこちらの向上めざし寸暇を惜しんで猛勉強。何とか A を取り、C が消えた GPA に収まった。



(パブリック・アイビー (Public Ivy League) と言われていたメリーランド大学)

博士課程の30単位中2科目(6単位)は学外でできる independent study (6本の文献批評の critique: review essay で社会学系の文献批評)を日本で、後一科目も日本でのフィールドワーク(日系アメリカ人の日本の移民母村研究)が認められ、書いては直し、直されのメールの行き来であった。Critique と Fieldwork は U of Md カリキュラムの non-residential study。他は授業出席が要求される residential 履修(科目領域は: American Studies Proper, Immigration, Ethnography, Culture Studies, Popular Cultures, American History, US-Japan Education)等だった。それと GPA には換算されない論文セミナーの単位(continuous education)と続いた。その間三分野(アメリカン・スタディーズの専門領域と関連領域そして自分の領域分野)のコンプを半年ごとに日本で書いた。

対外的に U of Md はパブリック・アイビー(Public Ivy League)といわれていた事は後で知った。後述の卒業式(Commencement)の100頁のパンフレット冊子にはこのように記されていた。大学教授の社会的資質(the quality of our faculty)は世界の三大賞:ノーベル賞;ピューリッツァー賞;フルブライト賞。<それぞれに受賞者がいるが、これらは単なる卓越性の称賛ではなく、一つの社会的側面を(あらあらに言えば)「理想実現」;「現地危機」;「自己批判」等の緊張を背景に、最高のレベルをやり抜いた業績への賞賛。優秀なファカルティーと首都圏の地の利を得て Library of Congress 等もあり自他共に評判も高い東部の州立大が、The University of Maryland, College Park 本校だった。博士課程の中でも厳格な授業で行われ、「思考」、「語学」、「議論」のパワーと精神力はそこで身に着いたと感じている。

UMCP では学籍上の advisor は1人で、規定により他5人に academic advisor を依頼した。厳しい指導もそれぞれのアドバイザーから受けたが、その内の一人(Dr BF と略す)はアメリカ生まれのユダヤ系アメリカ人女性(アイビー・リーグ、コロンビア大 Ph.D. の教育史専門教授。U of Md では professor of the year を受けていた。日本をよく研究訪問し NHK の日米教育番組等にも出演)。その先生(Dr BF)に、ある時ここでは文系・社会学系で言語記述が質・量共に高いレベルが要求されるので英語に疲れた:「アメリカ人はいいよね。英語で苦しまなくてもいいから」と愚痴を。研究室で2時間お説教された。曰く「私」は「英語」で苦しんだ。仔細はこうだった。コロンビア大で私はアドバイザー(アメリカ教育史の大御所)と歴史観で意見が合わない。彼の歴史観は grand scale operation の“authentic”で教科書的。私は一人ひとりが参加する社会構築の“community”史観が中心、日本的に言えば全体でもない、個でもない「班(行動)」に基礎を置く歴史生成。とことん議論をしたが価値観が合わない。最後はこのアドバイザーに“勝つ”ために、言語としての「英語」で優ろうと(ここはユダヤ系!)決心し、それからは表現芸術としての「英語」、言語構成としての「英語」、言語機能(説得や感動)としての「英語」の“最高”を目指し、必死に努力した、と。

この事は通常の授業でよく分かった。授業では学生・院生との Q&A、discussion が延々と

続くが、授業の後半では誰もしゃべらなくなる。ただ学生はひたすら先生の「英語」の表現をノートしているのだった。ある「日米比較教育」の一コマで日本の明治教育のエトスを“constructing opportunities”と括った。二つの単語はそれぞれごく普通の単語。しかしこの組み合わせにはなかなか気付かない。そしてこの先生の所から dissertation of the year をもらう論文がよく生まれる。＜あるクラスメートに対して、近郊のラトガース大に保管してある「明治のお雇い外国人」の資料の翻訳を手伝った事があった。その彼女が dissertation of the year に受賞。密かに自分も賞を狙っていたが・・・＞。またある時は教育社会学者、ロバート ベラーの名著、「Habit of Heart」をもじって（その旨の脚注付き）habit of “association”と Dr BF の論文にあった。気に入ってそれをそのまま注無しで自分の論文に使ったら“Footnote me.”と叱られた。出典を言わないのは剽窃(plagiarism)で academic honesty 違反＜入学時にクレジット・カード大の Honor Pledge と銘打った「宣誓」のカードを貰った。他人の功績を“きちんと” acknowledge するのは学問的社会倫理と再認識。

またある時 Dr BF は一つのキーワードについて時間をかけて“thickest” description をしてごらん、と言語表現のチャレンジをよく受けた。日本社会もご自身の教育領域であったので指導は厳しかった。よく“You can’ t stop here.”と言われた。「what」の世界は誰でも調べれば分かるし、「調査と記憶の世界」は努力すれば出来る。「why」は本人がする「思考と説得」力、しかも印象深く（知的に面白く）するのが文系の研究者の腕の見せ所。所詮 what は紹介の low level の世界で、why は reasoning＜ここからリーズナブルに始まり、ラショナルやレゾナートル等、理由や根拠を表わす外来語はあるにはあるが＞で自分の originality が出せる質的世界。what の世界で止めるのは単なる情報提供。そこから始めるのが本当の出発。そして印象深く、良質の言語を使って論じる事、日本人はいつもここが国際的に弱い(vulnerable)部分と。まさに言語コミュニケーションが不毛で国際的に“なうて”(infamous)の国、日本。言挙げを止め、論理を嫌い、議論を避け、とりわけコミュニケーション自体の考察や論理の展開になると面倒くさいと言って回避。このような私達の言語以前の言語状況(pre-linguistic behavior)が今も存在している。逆にコミュニケーション過剰で理論研究も修辞学もやりすぎで、食傷気味の英語圏(joke/humor banter: playful and friendly exchange of teasing remarks のメタ言語は非常に面白いし、sense of humor では危機も救われるが)がある。「過小と過度」、「嫌だと飽きた」の二極方向。この事に共通する事は、両者ともコミュニケーション学(communication studies)は人気がない事＜日本のこんな社会風潮の中でいくら時間と労力を掛けても、この態度が劇的に変わらなければ、英語は特に、その構成力や運用力はさみしい先進国ジャパン・・・。この意味でコミュニケーション学を専門にする高等教育でのコミュニケーションの知的フレームと運用の competency 育成にかける期待は大＞。日本人のこの傾向(“propensity”)を知るこのユダヤ系・アメリカ人・女性・アドバイザーに、“Toyoshi, talk, talk, talk to death”

と卒業式当日、励まされた事は今もって忘れている。

コースワーク修了の頃先輩たちの平均的な博士論文を秘書の office で見てきたと報告したら、叱られた、なぜ“best paper”を参考にしないのかと。日本人の平均志向と“謙虚さ”はここではダメ。弱いところを突かれたと心にグサリ。厳しさの楽しさの意味が分かる気がしてきた。頑張れば報われる（時には“面白く”）世界がアメリカの高等教育と実感できるようにもなった。このようなアカデミックの雰囲気から、「教育自体」の重要性を再確認。ここが意識的にした自分の my reflexivity（批判的自己省察）。教育とは学生をきちんと育てる事と深く思い、自分の大学の授業と論文セミナーはなお一層の熱を入れた。自分の畑は自分で耕す：il faut cultiver no-tre jardin と言ったボルテールの言葉も思い出した。幸い健康にも恵まれていたので、自己都合で休校にした事はなかった。

学校を離れてサバティカルの期間（一年プラス前後2夏休み）は終了し、帰国。また full-professor として四国学院大に勤務。教務部長職や大学院文学研究科科長なども歴任し、定年までは全学の国際交流委員長もしていた。まったく教育と研究と組織の事で忙殺中ではあったが、できるだけ夏冬春休みにはアメリカに毎年時間を見つけては行き、dissertation のため現地でのインタビュー（“書生”をしながら住み込みインタビューは生まれて初めて）と図書館通い。数多くの日系人二世にインタビューをしたが最後は3人に絞り込み、それぞれ過去・現在・未来の時系列のパラダイムに組み込んだ。書生をとしてのインタビューの一人は日本の伝統に生きた人。初めての出会いで「加瀬さん、日本人は“埴輪”の時代から変わっていませんねー」が気に入った。そして脚立を使い80歳を過ぎても庭木の剪定に精を出し、よく近所の人から危ないからとご注意を。当然次の日はご近所さん達が寝ている時間から始める。明治のしっかり女性＜アメリカのお母さんと呼んでいた。“息子”として書生は、1年で3か月半×4年間の住み込をしていた。日常のアメリカの「母」は自分を前面には出さず控えめだが、芯は強い人。他の人がはっきりものをいうのには、躊躇しつつも寛容。また満更ではなかったようだ。こんな話をしてくれた：お隣のアイリッシュ・アメリカン女性と銀行に一緒に。＜ワシントン州とは違い、ワシントンD.C.の人間は非常に unfriendly、特にアジア系の人には＞。銀行員の男女がお喋りをしていてなかなか仕事が進まない。ニコニコしてアイリッシュ・アメリカン女性が大声で、“Don’t touch her money while you’re talking with your boyfriend!” と言ってくれた。「加瀬さん私は恥ずかしくて、恥ずかしくて」と。しかし嬉しそうに話してくれた。こんな“lively”のインタビュー記録を含め論文を書き続けていた。

繰り返しになるが、課程の所定単位を取り終わり、論文に必要な文献収集と整理、追加インタビューの必要もあったので、勤務校の授業がない時はできるだけ頻繁にアメリカに行っていた。そんな中勤務との日程で渡米スタイルに日帰りアメリカ訪問（朝出て同日朝に着き、そしてその日の夜帰る）が3回あった。それぞれ車の免許証の書き換え、アメリカの“母”のお葬式、それと自分の卒業式だった。行き来の回数が多いので“uncontrollable”

な accidents/incidents によく見舞われた。9.11 はペンタゴン近くのホテルにいたし、スワット隊と共に物陰に潜んだり、ハリケーン、トルネードで地下室へ、学生引率があった時のホテル火災。エアーラインのダブルブッキングやストライキ、そして最後は自分の博士論文の口頭試問日、前々日からの大停電 (blackout) 等々だった。日本と違い停電の復旧に日数がかかる。冷蔵庫がダメなのでホテルの朝のパンは臭くなるし、防犯灯も点かないので車道以外、夜は月だけがたより。電気が来ないので口頭試問の日程は延びに延びて帰国最終日になった。帰国便に合わせ午前中だけの defence に短縮してくれた。“uncontrollability” のラッキー・バージョン！だった。半分だけの 3 時間半の審査で済んだ。30 分ぐらい別室で待機し Chair の教授が “Hi, Dr. Kase” と握手。本当にうれしかった。すぐ待機中の友人が飛行機場へと急いでくれた。帰国便では過去を “追憶” し、やや興奮気味。

振り返ってみると、U of Md に授業単位修得後 5 年間通った。しばらくして毎年論文完成に向けて研究科長から progress sheet が送られ事由 (rationale) を記入。2, 3 年は日本でフルタイムの教授職と役職<終盤戦のほぼ 2 年間は新しい大学院の設置申請委員長で文部省 (当時) 通い。論文は書けず、申請書類ばかり書いていた。<よかったのはアメリカの高等教育で普通に行われていた授業計画の「シラバス」、担当教授への「授業評価」、成績評価の「GPA」、実地研究の「Human Subject Review」等々の多くを“後倒し”して諸書類作成ができた事。結果は留保事項無しの認可>。そしてこれからが自分の論文と決意。申請業務は終わったものの他の仕事 (学内役職業務と社会貢献としての市役所の行革委員長等) もあり、通常の教育を最優先するも時間と体力の限界もあり、博士課程在籍の期間延長に更なる嘆願書 (petition) を送っていた。残りの最後の一年になった時、学長名で嘆願書についての最後通牒が来た: “This is absolute, final, unalterable, and set in concrete.” 二足の草鞋での追い詰められた綱渡りの最後の一年。デッドラインのこの年に pleasure はなく pressure だけ。やっと博士課程と博士号が全部終了・修了した時は、自分が自分に本当ご苦労さんと言っている自分がいた。<日本での 12 年間初等・中等教育、4 年間の学部教育を経て、もう 12 年間がアメリカでの高等教育であった>。

初めはほとんど意識していなかったがアメリカの博士号 (一部前述) は 2 種類に分化している。特定の職業の専門資格の (professional degree) としての doctorate。もう一つは特定分野を含みかつ超越する学問的学位 (academic degree) である Ph.D. (Doctor of Philosophy)。これが取得できた (“I made it”)。付記になるが前述の卒業式 (学位授与式) のパンフレットに Ph.D. がすべてを凌駕する最高学位としての位置付けの説明が明記されていた: Doctor of Philosophy, no longer has an implication of philosophy for its holder, but represents advanced research in any of the major field of knowledge. 広く他の人からの Dr. ～は社会的称号になっているが、それに加えて Ph.D. は、自分で名前を書く場合、英語では、名前の後にコンマして Ph.D. と書く (～, Ph.D.)。Ph.D. が名前に組み込まれてワンセット。ある時、一部授業を取っていた教育学部・研究科では EdD



(Doctor of Education) は「教育実践 vs 教育学」との微妙な関係で professional degree か、あるいは academic degree の議論も聞いた事もあった。

### 地道に走った 2 万キロ

学際性を念頭において海外での研究する傍ら、現地での生活体験という名の日常世界もあれこれ味わってみたいのが当初からの願いだった事は冒頭に述べた。現場にできるだけ積極的に入り込んで楽しみながら。これを実質的に可能にしたのは退職前の 3 か月間の短期サバティカルで(2回に分けて)その期間全部を車でまわった。この 10 か所の日系アメリカ人強制収容所跡地探訪のフィールドワークに味を占め、さらに退職後の 3 年半後にもう 3 か月間、今度は全く自由な立場でアメリカ大陸の約半分を車で家族旅行をした(合計 3 回で総走行距離が 1 万 2 千マイルの 6 か月の路上生活)。後者の旅行ではアメリカの歴史街道である「ルート 66」(シカゴからロスの隣のサンタモニカまでの約 6,000 マイル)の一部も走った。



そこは古い建物や街並みをそのまま残した文字通り歴史のリプレゼンテーション。当然ここはゆっくりゆっつりの走りを最高に楽しんだ。この 3 か月の期間中ワシントンでの講演や諸教会での日曜日のメッセージの機会等もあった(ワシントン講演記録やフルブライト出身地訪問はフルブライト 60 周年記念の「Senior Walk: フルブライトの足跡を辿って」

*The Fulbrighter*, Spring 2013, No. 31 に)。他人の旅行記（体験記も）は面白くないとよく言われる。現地の旅行を共有している人たちは現場を再現したりして楽しめるが、それがないとなかなか情緒や実感が湧いてこない。ただ同じ経験が無くても、ひたすら生きようとする次元まで降りていくと、人間同士共有できる本質、共通の根っこの気持ちが湧き上がってくるのもう一つの事実。こんな思い（思い込み？）で本文中のカッコ内参照文献の旅行記事との重複を避け、日常の生活で遭遇した、また“遭遇させた”出来事（現象・事象）を今カジュアルに“再想像”（re-imagination）してみたい。コメント付きで。

旅の記事そのものは東京のフルブライト・ジャパンや名古屋フルブライト・アソシエーションにそれぞれ掲載があるので内容は割愛し、今回の旅で同調できる「食」、「住」の日常のフィロソフィーを、よく利用したレストランとホテルに見つけたのでそのまま引用する：(1) 家庭的なレストラン（Visit Cracker Barrel Restaurant and old country store, where pleasing people with our delicious cooking and gracious service defines our country spirit. (2) 庶民的なホテル（As you hit the road in search for fun and adventure, remember that no matter where you end up, we'll be there to roll out the red carpets, sorry orange and blue carpets (Howard Johnson Hotel)).

ある年の冬、このハワード・ジョンソンホテルに泊まりクラッカー・パレルのファミレスで食事をしながらの冬の旅行中に西海岸で猛烈な猛吹雪（blizzard）に遭遇した。カーラジオは繰り返し“Stay indoors！”。しかし、アメリカ大陸を南のアリゾナ砂漠の 49° C からアリューシャン列島のダッチハーバーのマイナス 27° C、その温度差 76 度をひたすらツーリングしている者（本人の自負と直観、そして無事故無違反）として、夏は 53° C で死ぬから行くなと止められた「死の谷」（Death Valley）は冬なら大丈夫と確信し、そこに逃げ込んだ。海拔下 400 メートル（今は無き NY のツインタワーは上に同じく 400 メートル）は正解だった。冬の死の谷は快適そのもの。ブリザードの中心地と死の谷は地理的には近かったが、地形的には大きな高低差があり、理想的な冬の“避寒地”と感激した。季節の変更はしたが、「死の谷」制覇と自画自賛。3 日後に死の谷のアメリカ岩石砂漠の中にあった小さな（cozy な）レストランのトイレである落書きを見つけた。“砂漠を馬鹿にするものは呪われる”の前書きがあり次に続く：God, grant me the Serenity to accept the things I cannot change, Courage to change the things I can, and the Wisdom to know the difference.（変える事の出来ないものに対してそのまま受け入れる平常心と、変える事ができるものにはそうする勇気を、そしてそれら二つを識別する知恵を、神よ、与えた給まえ）の中で人間と自然の“関係性”が「死の谷」を背景に浮き彫りにされたトイレの中だった。この出典は神学者・社会倫理学者のラインホルド・ニーバーの詩であるが、「生活」や「社会」の中にごく“自然”なかたちで入り込んでいるフィロソフィーの発露と感動した。これらのレストランやホテルの文言はそのまま納得している。

「人と文（ふみ）」の出会いに加えて「人と人の」出会いを忘れる事ができない。まず、

リタイアの頃のバスの出来事（加瀬 “bussing” とよんでいる）に焦点を当てる。そこからの日常性について考えてみたい。ある日の移動中、乗るバスが見えたので（時々D.C.ではメトロバスに乗っていた）走って乗り込み、シニア割引の1ドルを料金箱にいれたら、年齢の事を執拗に聞かれた。アメリカの免許証をみせたらOKだった。これからは死にそうな老人顔をして走るからと苦笑い、事なきを得た。もう一つは違う路線の同じメトロバス。アフリカン・アメリカンの運転士がシニアの証明を見せろと。又免許証を見せたらメリーランド州の免許ではなく、ガバメントのものをと要求。年齢は州の免許で分かるし、なぜ政府の証明？の問に対して、市民権はあるのかと。旅行中はともかく、町の中の移動中はパスポートを持ち歩かないと答えた瞬間、アメリカでtaxは払っていないだろう、とすかさずつつこみが返ってきた。年齢は国籍に関係なく普遍的に誰でも歳をとっていく訳だし、アメリカのsocial securityも持っている。あなたは人種の事か、イミグレーションの事か、国籍の事を言っているのかと運転士に聞いた。他の乗客は3人のアフリカン・アメリカンと思しき女性と我々夫婦。雰囲気的に人種同士の結束もあるのかと感じたが、2人の乗客が運転士の所に来て一言。“にもかかわらず”の憲法が出てきた。They’ re talking about American Constitution! Regardless of sex, racial background, national identity..., 一人がここまで羅列したらこの男性の運転士は急に興奮し、急発進、蛇行運転、急停止を始めた。我々を含め5人の乗客は怒りの顔と顔。現在のアメリカ社会では外見からの判断は意識的に避けているし、社会の応募書類には皮膚の色で写真はつけないのが現実。人権に基づく社会的配慮の時代にこのアフリカン・アメリカンの男には困ったもんだ……。こんな無謀運転はアメリカにいて初めての災難だった。乗客がアフリカン・アメリカンの仲間意識で運転士と同一歩調で結託するのではなく、事柄に対しての“what is right”（日本語の“正義感覚”は表現として大袈裟過ぎるが）がその時のその場での日常の行動。一種のアメリカの市民感覚の健全さを体感したと今も思っている。＜この一件は運転者側対乗客側からの友情であったかもしれないし、あるいは他の理由であったのかもしれない＞。

次はこちらからした“言語媒介行動”。フルブライト出身のアーカンソー大学から車で1日中走りアトランタに着いた。『風と共に去りぬ』のマーガレット・ミッチェルの記念館を見学し、“When I’ m weak, I have written.”に作家のポジティブな創作意欲にまず元気を貰った。次に現地に溶け込もうとバスで市内を回った。バスに乗ったらほとんどがアフリカン・アメリカン。なんとなくぎこちない雰囲気を自分で自分の中につくっているような気がした。が、近くの人に元気よく“Howdy, man?”や“What fuck are ye doin’, man?”と話しかけ挨拶。また咄嗟に“A penny for your thoughts”と古臭い英語が口から洩れてしまった。その男にウォークマン（音が漏れっぱなし）と一緒に歌おうと誘われた。“肩を組んで01’ Man River”3回も繰り返しバスの中で一緒に歌った。隣の人も気さくに加わってきた。交流の輪ができお喋りを楽しんだ。皮膚の色ではなく場面を構成するのは、その時の言語がつくる共有アイデンティティー集団と実感。挨拶は「交感的言語交際行為」(phatic

communion)。そして徐々に次の段階に発展していくのが“interpersonal communication”と大学の講義調で自分が自分に語っていた。

＜関連した以前の体験について再想像してみたい。しばしの挿入（extrapolation）を許されたい。少し前に 30 名の学生を引率した NY でアフリカン・アメリカンのガイドがついた（親しくなって、自分は声量もあるのでブロードウェイで成功したかった、と明るく身の上話）。2 日間の案内を貸し切りバスの中でミュージカルでして貰う事になった。非常に感じの良い紳士だったので、お礼にワシントン広場で心行くまで歌ってもらおうと学生と相談し、にわか仕立ての“興行”をした。さくらで帽子の中に出るだけ 5 ドル札以上をこれ見よがしに入れ、引率学生 30 人がその広場にいる人々を“ミュージカルのプロ”とふれ込み、沢山の周りの人々を誘った。“観客”の前での歌は素晴らしくお金もたくさん集まり大成功、そして全収益をこのミュージシャンに。彼の目に涙が流れていた。学生ももらい泣きの涙を出していた。ブロードウェイでの成功を夢見てとてつもない数の人たちがここで努力するが、日の目を見る人はほんの一握り。この人には世界のブロードウェイで再起、活躍を願う。

NY の 2 日目。契約にはなかったが、日曜日にハーレムを案内してもらおう事となった。ハーレムの中のアポロ・シアターにも立ち寄り、学生たちは本場に行けた事で大感激。そしてさらに北に進み、「Church of Paradise」という名の教会の日曜礼拝に。誰が牧師か、司会者か分からない会衆直接参加型の礼拝に圧倒された。讃美はぞくぞくする和音（楽譜無しで）だったし、祈りも、証詞も、讃美も皆その場の即興（と感じた）、そして吸い込まれるような時間を過ごした。＜筆者はこの時をきっかけとして、楽譜のない時は他の音を聞きながら同時に和音をつくり、その場でのハーモニーのコーラスをずっと楽しんでいる。同時通訳の手法と同じ＞。この“天国教会”では誰かが話すとすぐ続いて話し（心地よいテンポのオーバーラップも）、内容が見事に繋がる。そして要所、要所に心からの Amen。今迄ミッションスクールの教員としていろいろなタイプの教会に出席したが、こんなパワー全開が自然に溢れる集会は初めてであった。霊的覚醒の“飽食”のハーレムと言ったらいいのだろうか。NY だけがアフリカン・アメリカンのガイド付きではあったが、学生達も生まれて初めてのハーレム体験だった。＜そして今もこの年度の「外国事情米国」（一か月の海外研修の付きの授業）を履修した学生達の自慢話になっている＞。

本論に戻り、アトランタでは、今度はまったく一人でアフリカン・アメリカンの多いこの地域（racial composition）の中で、こちらからアクティブに雰囲気をつくり、時間と空間を共有した。南部の都市アトランタの人々は皆打ち解けると滅法フレンドリー。最後にアトランタ空港でレンタカーを返し、D.C. までは飛行機の旅。搭乗カウンターに 2 人のアフリカン・アメリカンがいたので、“What fuck are ye doin’ , man?” と同じセリフで。少し間があり一人がもう一人を指さし、“This man took my girlfriend.” と大きな声をだす。ウドウド、クドクド痴れ事を長々続けられた。出発の時間が迫る。自己開示（self-disclosure）

はもういい。早く搭乗手続きをと時計を見せる。「Oh!」と言、言ってハードのスーツケースを正しい手でベルトコンベアーに放り投げた。何か壊れた様子ではあったが、そのまま流れていった。案の定 D.C. の飛行場のターンテーブルの上で見たのは蝶番が壊れ、口がいたマイサムソナイト。空港職員にアトランタの girlfriend の一件を笑いながら伝えた。この笑いの空間の中には客のクレームに対する緊張が全然ないと感じた。本当に笑顔で “Follow me, sir.” と言ってその職員は別室のトランクルームに案内してくれた。そしてその白人女性の職員は大中小のさまざまな新しいスーツケースから好きなものを持って行っていいよ、といい雰囲気。“Could I possibly take two?” と “丁寧に” ふざけて、しかも “pleasing voice” <ハワード・ジョンソンホテルの “pleasing people” になって>で囁いた。答えはにべもなく “No way.” だった。その場の空気や気分には流されないこの人たちは、時として一見隙だらけに見えるが、しっかりしたものを持っている。これはアメリカ人のカジュアルな性格の中にあっても、自分を失わないアイデンティティーと言うといい過ぎか。その場にかまけ、図に乗った要求を “ポストモダンの脱中心化” による “ずらし話法” で人は騙せない、と自分に言い聞かせ、一番大きいソフトの新品のスーツケースと交換した。今度の旅行には柔らかい布製のものがいいと確信し、今も愛用。皮膚の色の区分ではなく言語がつくり出す「場面拘束」の雰囲気をそれぞれの場面で楽しめたとも思っている。It’s fun.

## 最後に

文系・社会学系の記述はきつい世界と実感した。特に外国人学生には本当に厄介。しかし言葉は言語使用域 (register) で広げられるし、楽しめるのも言語。“vivid” に発せられた言葉は、それが含み持つ活力、生命に繋がり美しい芸術にもなる。「“感情的”になる感情」を「“感動”する感情」にパラダイム・シフトできればそれは素晴らしいコミュニケーションの世界、コミュニケーション学の目的論の大切な一つ (communicology の value) と強く感じている。長期にわたりアカデミックの領域でアメリカを探訪し、日常のアメリカを逍遙し、思いの丈や焦点を当てた取材部分を今回厚く、そして熱く語り刻んだつもりである。ある意味でこれは自・他のエスノグラフィー (ethnography) のエッセイ/essay とも感じている。今まで長々とアメリカについてふれてきた (個別の話題に引きずられ “時系列” を無視した discursive な記述になってしまったが) 研究生活と日常体験を最後に項目毎にここで纏めてみる。健全な戦いの場であるアカデミズム、西・東海岸の州立大での高等教育、学際性という名の関係学、ドラマになった世代文化の衝突、講演会での専門家同士の共通の要素認識、バンターの乗りでの悪意なき (innocent な) からかい、競争に見られた子ども同士の世界、マニフェスト風にした宣伝文と人生訓の発信、バスでのやりとり等々を、“それなりに” 楽しんできた。大きな括りで表現すると、言語と文化と人間の語用論 (cultural pragmatics : language usage といった言語の「語法」ではなく、language use といった人間がする「言語使用」)、あるいは場面を拘束 and/or 支配している環境・文化の中での人間の言語行動と

言えよう。そしてその体系や理論を具現化 (life application and reification) する素材・材料は、アカデミックな世界にも、日常の世界にも遍在していると確信している。

アメリカン・スタディーズという専門とアメリカという地域が与えられ、その空間の広さに加えて、歴史という時間の長さが与えられ、学問的な深さもチャレンジングな考察で練られたと思っている。そしてさらに高いものを目指したいとの志を今も抱いている。「・・・広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を・・・新約聖書のこんな Scriptural Wisdom も研究に重なり合う気がしている。こんな全方位の研究を可能にし、実現に至らせてくれたフルブライト・プログラムに最後になったが、謝辞を述べたい。感謝。

最後にもう一つの最後に一言を述べさせて欲しい。過去を紡いで・現在に生き、未来に投げかけていくといった“高尚な”時系列が博士論文 (my dissertation) の屋台骨であったが、この思索 (“sophistication”) は定年後のアメリカ旅行の一地方での一発見で見事に“骨抜き”になった気がした。旅行中のコンビニ (アメリカのセブンイレブン) で見つけ、即購入したゴム印は：“Cherish yesterday, Live today, Dream for tomorrow!”であった。年賀状に押しまくり、毎年乱用中。アカデミズムの最終の“幸福の青い鳥”はキャンパスの中ではなく、身近なところにあったのだった (unwitting knowledge)。日常への更なる目覚めになった。専門性と日常性の関係の“宝”は現地・現場への参加 (participation) で生まれてくるので “Just do it”。



## 第2章「ヴェトナム戦争の時代」と向き合ってきたこと ートランプ政権発足後のアメリカの行方にも言及しながらー

藤本 博（南山大学教授）

名古屋フルブライト・アソシエーション例会で講演する南山大学藤本博教授  
（2017年2月18日、椙山女学園大学）



はじめに

## 1. 私のヴェトナム戦争研究—フルブライト留学とその後

南山大学の藤本です。私が大学院時代にフルブライト留学生としてニュージャージー州のラトガース大学 (Rutgers University) に留学したのは1977年秋のことでした。したがって、フルブライト留学生として初めてアメリカ合衆国（以下、アメリカ）の地を踏んで今年（2017年）でちょうど40年が経たことになります。1980年初頭まで滞在し、当時はカーター政権時代でした。このような節目にあたる時期に皆様にお話しさせていただける機会を得、大変嬉しく思います。

年齢的に過去を振り返る時期に入り、自分にとって節目の時期にあたることもありますので、本日は、自分がこれまで研究テーマとしてきました「ヴェトナム戦争の時代」と向き合ってきたことについてお話させていただきます。話を進めるうえでは、政権発足直後から話題の絶えないトランプ政権の行方にも言及しながらお話し致します。

なお、「ヴェトナム戦争の時代」と言う場合、一般的にはアメリカがヴェトナムに戦闘部隊を投入する1965年3月前後からその戦闘部隊を撤退させる1973年頃までの時代を意味しますが、ここでは、「インドシナ30年戦争」の文脈で、すなわちヴェトナム民主共和国が独立する1945年9月から「アメリカの戦争」が挫折してヴェトナム戦争が終結する1975年4月までの時期を「ヴェトナム戦争の時代」と位置づけてお話しします。

## 2. アメリカ社会の現在と「ヴェトナム戦争の影」

ヴェトナム戦争は1975年4月に終結しましたので、ヴェトナム戦争終結から今年で42年になります。これからお話するにあたり、まずは、ヴェトナム戦争が今日のアメリカ社会で何らかの影響をもち続けていることについて、二つの事例をご紹介します。

一つは、トランプ政権と関係することです。トランプ大統領は大統領就任直後の1月27日に中東・アフリカ7か国からの入国を一時禁止する大統領令を出しました。しかしながら、連邦控訴裁で差し止め命令が出されるなど多くの批判を浴びています（「政権側は7か国の出身者がアメリカでテロを起こした証拠を示しておりません」。国内のさまざまな批判の中で私の目にとまったのが、1月31日段階で約1,000名の米国務省職員が「実効性に欠け、テロ対策にはならず、反米感情を高めるだけ」として反対の意見書に賛同したとのニュースです。とくに興味をそそられたのは、意見表明がヴェトナム戦争中の1971年に職員が外交政策に異論を唱えられるよう創設された“Dissent Channel Message”（意見書制度）に基づくものということです。ちなみに、私の知り合いに日本の元外交官の方がおり、このような制度が日本にもあるかを尋ねたところ、「ない」との返事でした。米国務省には、約7,600人の外交官、約1万1,000人のcivil servants（職員）がいるとのことですので、かなりの割合での反対表明です（外交官がその内、どれだけかは調べておりませんが）。

もう一つは、この報告を準備する過程で知ったのですが、今年2017年が1967年から数



えて 50 年目にあたることから、*New York Times*（電子版）でヴェトナム戦争に関する連載コラムを毎週掲載しています。1967 年は米軍派遣が 40 万人の規模に達していたと同時に、後から述べさせていただきますように、キング牧師など黒人運動家も反戦運動に加わり、徴兵拒否運動が高まるなど反戦運動も量的、質的に大きな変化を見せた時期で、その今日的意味を考える企画になっています<sup>1</sup>。

### 3. フルブライト留学生として学んだラトガース大学について

本題に入る前に、ここで、私が留学したラトガース大学について紹介させて下さい。

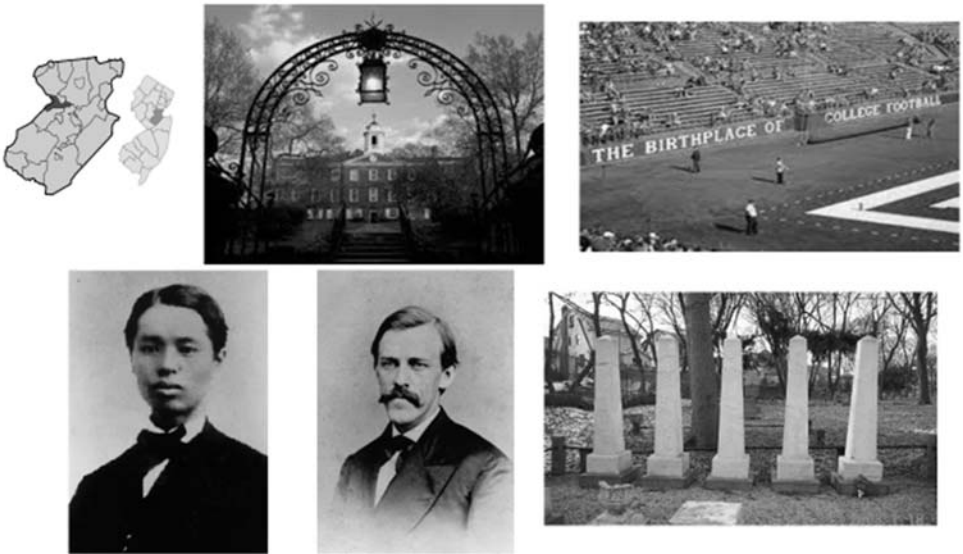
ラトガース大学がニュージャージー州における最大規模の州立大学で、そもそもは 1766 年創立の Queen's College に遡り、アメリカで 8 番目に古い大学であることは留学前に知っていました（次ページ写真左上が当時のキャンパスであった場所を示すものです）。2016 年で創立 250 周年を迎え、同年 5 月の commencement には来賓として当時大統領であったオバマが演説をしています。

ラトガース大学で学び始めてからこの大学の歴史に関して興味深い二つのことを知りました。一つは、College Football の発祥の地であることで、1869 年 11 月 6 日に行われたプリンストン対ラトガースの試合がその始まりです。現在、ラトガース大学のフットボールスタジアムに”The Birthplace of College Football”と書かれています（次ページ写真右上）、もう一つは、新島襄が学んだマサチューセッツ州の Amherst College と並んで、ラトガース大学が江戸末期から明治初期の日本人留学生のメッカの一つであったことです。後者の点で言えば、ラトガース大学は官費留学生として最初にアメリカで学士号を取得した日下部太郎（下記写真左下）を輩出しており、ラトガース大学には明治維新直前の 1866 年以降の約 10 年間に約 40 名に日本人の若者が学んだと言われています。ラトガース大学のあるニューブランズウィック（New Brunswick）市内の墓地 Willow Grove には日下部太郎はじめ当時の何人かの日本人留学生の墓があります（下記写真右下）。

ラトガース大学は、このように日米文化交流の揺籃の地であったわけです。グラーマー・スクールで日下部太郎を教えたウィリアム・グリフィス（William E. Griffis、下記写真下中央）は、お雇い外国人として来日して、日下部太郎が越前藩（福井出身）であったことから藩の米国人教師として福井にも滞在し、そしてこのことが縁で福井市と New Brunswick 市は 1982 年以来姉妹都市関係を育んでいます。日下部太郎とグリフィスとの出会いの歴史を含めてグリフィスの足跡を辿る「福井市グリフィス記念館」が 2015 年 10 月に開館しました。

---

<sup>1</sup> この連載企画の記事の内容については、以下のサイトを参照。  
(<https://www.nytimes.com/column/vietnam-67>)



前置きが長くなりました。これから最初にトランプ政権発足後の状況について、次いで、「ヴェトナム戦争の時代」とは何であったかについて、そして最後に、「ヴェトナム戦争の時代」の未完の課題とトランプ政権の対応の行方、といった内容で順に三題漸的にお話しさせていただきます。

## I トランプ政権発足後の状況を考える

### 1. ”America First” と「アメリカのかたち（自画像）」の転換—「歴史の歯車」の反転？

最初にトランプ政権発足後の状況についてです。トランプ政権は「歴史の歯車」を逆転させ、また「歴史を忘却」させる状況を作り出しかねないのではと危惧しております。

トランプ大統領は、中間・低所得白人層の怒りと不安をもとに支持を獲得し、自国利益優先の”America First”と”Make America Great Again”を掲げ当選しました。アメリカは建国以来、「普遍国家」として世界の「灯台」であることを自負してきました。とくに第二次世界大戦後には、理念（自由と民主主義の価値）を掲げて世界秩序の形成・維持者の役割を果たし、国内的には黒人の平等を求める苦難の運動等の遺産をもとに多人種・民族社会をめざす「実験国家」を目指してきたと言えます。トランプ大統領の発足は、こうした「アメリカのかたち（自画像と言ってもよいかもしれません）」の転換につながりかねないものです。この意味では、「歴史の歯車」を反転させかねないものです。

トランプ政権発足の方向性について一つだけ補足させていただきます。「トランプ現象」は、イギリスのEU離脱と同時的現象ですので、世界史文脈でみるのが大切だと考えてい

ます。この間、新聞に紹介されていた二人の世界的論客の意見に注目しています。

一人は、長らくニューヨーク州のビンガムトン大学で教え「世界システム」論を提唱したことで有名なイマニュエル・ウォラースタインで、「今の米国は巨大な力を持っていても、胸をたたいて騒ぐことしかできないゴリラのような存在。……世界の資本主義システムは構造的な危機を迎えている」と述べています（「覇権衰えた米国 衝撃は国内にとどまり構造的危機の時代 インタビュー：トランプ大統領と世界」『朝日新聞』2016年11月11日）。もう一人は、フランスの歴史人口学者のエマニュエル・トッドで、広がる経済格差、移民の流入による伝統や文化の破壊が世界的に生まれているのは、「グローバル化の疲れがまん延」していることの結果だと述べています（『毎日新聞』2016年10月21日）。いずれも現在のシステムが行き詰まりを見せていることを指摘している点で共通していると言えます。

## 2. トランプ政権下での三重の「歴史の忘却」―「ヴェトナム戦争の時代」との関わりで

### （1）三重の「歴史の忘却」

次に「ヴェトナム戦争の時代」との関わりでトランプ政権の姿勢に目を移してみますと、三重の「歴史の忘却」の中にわれわれは置かれているのではないかと考えています。

一つは、トランプ政権は、関税強化による国内産業振興と雇用創出を目的とした「保護主義」的な通商政策を志向し、外交・安全保障面では、国際協調的姿勢を後退させています。

「保護主義」、「排外主義」の台頭が第二次世界大戦を生み出し、その反省としてブロック経済の解体、自由貿易主義の推進、国連中心の国際協調主義が構想された歴史が忘却されています。第二次世界大戦の終結は国際社会、国内社会の民主主義が現実的に定着していく条件を生み出したわけですし、後から言及させていただきますヴェトナム民主共和国独立（1945年9月2日）も第二次世界大戦後における民族独立の現実化を示す象徴的な出来事でした。

二つ目は、トランプ政権は自国利益優先の外交の担保として「世界最強の軍事力の構築」と「核兵器能力の維持」、さらには、アフガニスタンやイラク、シリアなどでの「対テロ戦争」の継続を目指しており、アメリカは反共主義の外交の帰結のもとでヴェトナムに関与・介入し、アメリカ史上初の海外での挫折を経験した歴史が忘却されています。

第三は、アメリカ国内ではヴェトナムでの挫折の過程で女性や黒人、先住民などマイノリティの覚醒をもとに国内では多人種・多民族共生社会（＝国際社会における「実験国家」）を模索してきた歴史が忘却されています。「多様性の中の統一」＝「移民大国アメリカ」を特徴とする社会が揺らぎ、社会における排外主義、分断が一層進むことが懸念されます。さきほど紹介した国務省職員の意見書では、世界におけるアメリカの moral leadership を崩して「移民の国」アメリカとしての責務とは逆の姿を示しており、第二次世界大戦期の日系人強制収容などの「暗い時代」を想起させると述べられています。アメリカでは移民受け入れを前提に成り立ってきたIT産業やスポーツ界からもトランプ批判が出ているのが皆さ

んご承知のとおりです。

トランプ政権下においては、このような三重の「歴史の忘却」と言える状況を生み出しかねないと私は考えています。

## (2) 2016 年大統領選挙における中西部 3 州の選挙結果をめぐって

ここで今回の選挙結果に戻って、断片的ですが一つだけ気が付いたことをお話しします。

今回のトランプ当選の背景にはトランプが「ラストベルト」(製造業が中心であったペンシルヴェニア、ミシガン州など)の白人中間層の怒りに火をつけ これまで民主党の牙城であったペンシルヴェニア、ミシガン、ウィスコンシンの各州で勝利したことが大きいと言われています。ただ、選挙結果をよく見てみますと、3 州とも一般投票の得票差は 1%未満です。この 3 州(選挙人は 46 人)で民主党候補者のヒラリー・クリントンが当選していれば選挙結果は違うものになっていました。また、ご存知のように、一般投票は、ヒラリー・クリントンが約 300 万票上回っています(以上の点について詳しくは下記参照<sup>2)</sup>)。

### 中西部 以下の3州(選挙人 46人)

**\* 92年以降 民主党 6連勝⇒2016年大統領選挙で共和党トランプ**

ペンシルヴェニア州(約44万票差,0.7%)

ミシガン州(11万票差,0.3%)

**\* 88年以降、民主党**

**7連勝**

**⇒2016年大統領選挙で共和党トランプ**

ウィスコンシン州(23万票差,0.7%)



<b>* 2016 大統領選挙結果</b>	<b>選挙人</b>	<b>一般投票</b>
トランプ	306	62,985,106 (45.9%)
クリントン	232	65,853,625 (48.0%)

## II 「ヴェトナム戦争の時代」とは何であったか

では、次に、「ヴェトナム戦争の時代」とは何であったかについてお話しします。具体的には、「ヴェトナム戦争の時代」に向き合ってきたこととの関連で、「トランプ現象」を前に何が大切かに思いを馳せてみたいと思います。その前に、これまでの約 40 年にわたる自己の研究の視点と関心の変遷についてお話しさせていただきます。

<sup>2</sup> この大統領選挙結果については、以下を参照。 “Presidential Election Results: Donald J. Trump Wins,” *New York Times*. (<https://www.nytimes.com/elections/results/president>) (2017 年 9 月 1 日アクセス)。

## 1. 「ヴェトナム戦争の時代」に向き合って考えてきたこと

### (1) 自己の研究の視点と関心の変遷

私は、これまでの約 40 年の間、ヴェトナム戦争史の研究に従事してきました。とくにアメリカの政策と現地ヴェトナムの抵抗運動との交錯を視野に、アメリカがヴェトナムで何を行ったのかに光をあてながら「アメリカの力の限界」を明らかにする外交史研究を進め、第二次世界大戦後の国際関係を長らく特徴づけた「冷戦」と何であったかを考えてきました。自分の研究の視点と関心の変遷を時期区分すれば、以下の二つの時期に分けることができます。第一の時期は、大学院生の時期を含め、大学教員になって以降の約 20 年間で、時期的に言いますと 1980 年代を経て、1990 年代後半に至る時期です。そして第二の時期が、1990 年代後半から現在までということになります。

第一の時期の研究関心は、ヴェトナムの民族解放運動の進展を射程にアメリカの対ヴェトナム政策の考察を目的としたヴェトナム戦争の起源の研究で、研究対象の時期としては、1945 年前後のヴェトナム民主共和国成立から、1963 年 11 月にアメリカが支援していたヴェトナム共和国（南ヴェトナム）のゴー・ディン・ジエム政権が崩壊する、アメリカの大統領で言えば、ケネディ政権末期までの時期にあたります。

第二の時期である 1990 年代後半からは、ヴェトナム戦争の起源をめぐる研究から、研究対象の時期を 1960 年代以降に移し、「アメリカの戦争」の時代の諸相ならびに 1975 年まで続く「アメリカの戦争」の実相とその今日的遺産に関しての研究に焦点をあてることになりました。ここで考えてきましたことは、以下の二つの点です。①ヴェトナムにおける「アメリカの戦争」は第二次世界大戦後の戦争の中では「最も破壊的戦争」になったのはなぜか（アメリカがヴェトナムを含むインドシナで使用した砲爆弾量は第二次世界大戦中に連合国が使用した額の 2～3 倍にあたる約 1,500 万トンで、米軍戦死者は約 5 万 8,000 人、ヴェトナム民間人死者は約 200 万人に及びました）、②ヴェトナム戦争中にアメリカ史上最大の反戦運動、世界的な反戦運動が展開されたその世界史的意義はどこにあるのか。これらの二つの問いをもとに、それぞれがいかなる教訓と遺産を今日投げかけているのかについて考えてきました。

### (2) ヴェトナム戦争の性格と「冷戦」の時代への理解をめぐって

ここでヴェトナム戦争の性格づけと「冷戦」の時代をどう把握できるのかについての私が考えていることを述べさせていただきます。

ヴェトナム戦争は「米ソの代理戦争」であったとの見方があります。しかし、戦争史の推移をみますと、1955 年の米ソによる「1955 年体制」（＝現状維持的な勢力均衡。この年にアメリカが肩入れしてヴェトナム共和国が樹立され、ヴェトナムが南北分断された）をヴェトナムの「抵米救国」闘争が突き崩していったというのが真相に近いと思います。ソ連はこのヴェトナムにおける冷戦体制の「現状維持」をむしろ推進しようとしたのであり、例えば、

1950年代後半には南北ヴェトナムの国連同時加盟を提唱しています。当時のヴェトナム民主共和国の大統領で、ヴェトナム独立運動の父であるホー・チ・ミンはこのソ連の提案に反対しました。

1960年12月の南ヴェトナム解放民族戦線の成立を受けて、アメリカは1961年のケネディ政権成立以降、軍事介入を開始し、1965年3月に直接戦闘部隊を派遣しました。そして、粘り強いヴェトナム解放勢力の抵抗を受けて、1973年に戦闘部隊の撤退を余儀なくされ、アメリカが海外での史上初の「敗北」を喫し、軍事的挫折を味わうことになったわけです。ヴェトナムの民族的抵抗によってヴェトナムでの「冷戦」の勢力均衡が崩壊したというのが、ヴェトナム戦争の構図です。米ソ両国がヴェトナムにおいて米ソの「勢力均衡維持」をもとに冷戦体制を確立したいと考えていたものの、ヴェトナム解放勢力がその体制を突き崩したという意味で、「冷戦の逆説」をヴェトナム戦争の歴史は示唆していると言えます<sup>3</sup>。

では以下、「ヴェトナム戦争の時代」とは何であったかについて具体的にお話します。ここでは、「トランプ現象」にどう向き合うかを考えるヒントを得るために、「ヴェトナム戦争の時代」の教訓と遺産について考えてみたいと思います。

## 2. 「ヴェトナム戦争の時代」の一つの教訓に学ぶ——第二次世界大戦終結の意義（ヴェトナム民主共和国成立）とヴェトナム戦争史の中の最初の「失われた機会」

### （1）フルブライト留学と私のヴェトナム戦争研究の始まり——世界史における第二次世界大戦終結の意義への着眼

トランプ政権は国際協調的な動きに後ろ向きであり、この意味で国際協調主義の「光と影」を見る意味で、最初に第二次世界大戦の終結の時期まで遡ってみます。広い意味での「ヴェトナム戦争の時代」の文脈では、1945年9月に独立したヴェトナム民主共和国をアメリカが承認せず、フランスの本格的な最侵略が始まる1946年12月までの時期がヴェトナム戦争を回避する最初の「失われた機会」を意味したことに立ち戻ることになります。

大学院時代の修士論文ではアメリカの軍事介入の端緒をなすケネディ政権のヴェトナム政策をテーマに研究しました。私が博士課程に入った頃、第二次世界大戦直後の時期におけるアメリカ側の外交史料が解禁され始め、アメリカでは第二次世界大戦期から戦争終結直後の時代におけるアメリカとヴェトナムの関係史に注目する研究論文がいくつか刊行されておりました。こうした史料状況と研究状況に刺激を受け、フルブライト留学生としてアメリカで研究していた期間は、1945年9月のヴェトナム民主共和国成立前後におけるアメリ

---

<sup>3</sup> 1945年からの1975年までの広い意味での「ヴェトナム戦争の時代」を俯瞰し、この「冷戦の逆説」という視座を提示した論考としては、以下を参照いただければ幸いです。拙稿「20世紀後半期の国際関係とアメリカ的世界——「冷戦」とベトナム戦争」草間秀三郎・藤本博編『21世紀国際関係論』（南窓社、2000年）所収。

カ政府の対応について研究しました。アメリカに滞在していたメリットを活かし、トルーマン大統領図書館や米国立公文書館に足を運び関連の史料調査・収集を行うことになります。アメリカ外交史研究者として一次史料に直接ふれての歴史研究の醍醐味を初めて味わっただけに、今でもこの時期の研究生活が懐かしく思い出されます<sup>4</sup>。

## （２）ヴェトナム戦争史の中の最初の「失われた機会」（1945～1946 年）—ヴェトナム民主共和国独立とアメリカの対応

ここからは、ヴェトナム戦争史の中の戦争を回避できる最初の「失われた機会」（1945～1946 年）のことについてお話します。この時期のことは、興味深い歴史のエピソードであるといつも考えています。

この「失われた機会」については、米越の戦争当事者によって開催された「ヴェトナム戦争検証会議」（1995. 年 11 月～1998. 年 2 月 マクナマラ元国防長官の提唱で開催）で、ヴェトナム側から以下の見解が出されています。「もし 1945 年 4 月にホー・チ・ミンがトルーマン大統領に送った手紙にトルーマン政権が返事を送っていたら、もし[戦後]フランスがヴェトナムを再び占領するのをトルーマン政権が阻止していたら、ヴェトナムがフランスとおよびアメリカとの戦争を経験することなしに、独立と統一を達成する機会が生れたことだろう。<sup>5</sup>」

さきほどお話ししましたように、「保護主義」「排外主義」の動きが第二次世界大戦を招いたとの反省から、国連憲章全文で「基本的人権と人間の尊厳及び価値と男女及び大小各国の同権とに関する信念をあらためて確認」することが謳われ、この理念のもとに国連を中心とする国際協調主義の推進が構想されていました。当時、被植民地国のリーダーとしてこの点を理解していた指導者の一人がヴェトナム民主共和国初代大統領に就任するホー・チ・ミンでした。ホー・チ・ミンは、1945 年 9 月 2 日に約 50 万人のヴェトナム民衆を前に読んで「ヴェトナム民主共和国独立宣言」において、以下のとおり、フランスの復帰反対とヴェトナム民主共和国の独立承認をアメリカに期待して、「アメリカ独立宣言」をその冒頭に引用し、またその末尾で 1945 年 4 月にサンフランシスコで開催された国連創設会議で採択された「国連憲章」のことにも言及したのでした。

すべての人間は生まれながらに平等である。かれらは造物主によって、一定のうばいがたい権利を付与され、そのなかには生命、自由、および幸福の追求がふくれまれる。この不滅の言葉は、1776 年のアメリカ合衆国独立宣言の中で述べられたものである。その広義の意味は、地球上のすべての民族は平等であり、生存する権利、幸福かつ自由である権利をもつということである。……われわれは、

<sup>4</sup> この研究成果は、アメリカから帰国後、以下の論文としてまとめることができました。「アメリカ合衆国と 1945 年ベトナム 8 月革命」『歴史評論』第 373 号(1981 年 5 月)。

<sup>5</sup> ロバート・マクナマラ編『果てしなき論争』（共同通信社、2003 年）、59 頁

テヘランとサンフランシスコで民族自決と平等の原則を認めた連合国が、ヴェトナムの独立を承認することを拒否するはずがないと確信している。

そして、アメリカが新生ヴェトナム民主共和国を承認し、予想されるフランスによる再侵略を阻止してくれるものと期待して、ホー・チ・ミンは1945年10月から1945年2月の間に7通の手紙と2通の電報をトルーマン大統領やバーンズ国务長官に送付したのです<sup>6</sup>。

フルブライト留学生としてアメリカに滞在していた期間、ヴェトナム民主共和国成立前後におけるアメリカの対応について研究していましたが、アメリカ政府の対応を考えるうえで、トルーマンはホー・チ・ミンが出した手紙をホワイトハウスのデスクで直接読んだかどうかに関心が向きました。そこで、もし読んだとしたならばトルーマン大統領在任中の史資料が保管されているトルーマン大統領図書館に所蔵されていると考え、ミズーリ州Independenceにあるトルーマン大統領図書館に史料調査のため出かけました。そこでの史料調査の結果、ホー・チ・ミンの手紙はトルーマン大統領図書館にはなく、当時は首都ワシントン市内にあり（現在は、その郊外のCollege Park）、米国务省関係の外交史料を所蔵する米国立公文書館にあることをつきとめました。この史料調査から推測されることは、当時、ヴェトナムの動向はアメリカ政府の外交的なプライオリティが低く、国务省の下部のレベルでの関心にとどまり、ホー・チ・ミンの訴えは大統領まで届いていなかったのではないかということです。こうして、アメリカ政府は当時、フランスの再侵略を止める措置を何もとらず、後のヴェトナム戦争に至らなくてすむ最初の「失われた機会」となったわけです。

### （3）「愚行の歴史」としてのヴェトナム戦争史の中の最初の「失われた機会」

以上の歴史的経緯は、アメリカは国連を中心とする国際協調主義の推進を構想していたものの、第二次世界大戦を生む原因の一つとなった植民地主義体制からの解放を唱えたホー・チ・ミンの想いが現実にはアメリカ政府の中枢には届かなかったことを意味しています。第二次世界大戦中にホー・チ・ミン率いる抗日ゲリラを支援していたアメリカの戦略任務局（Office of Strategic Services, OSS）の現地メンバーはホー・チ・ミンに共感を示していました<sup>7</sup>。また、ヴェトナム民主共和国独立後にフランスが再侵略を開始したのを受けて、サイゴン駐在の米人顧問は「予見できる将来と期間、状況の収拾は期待できず、ゲリラ戦が続くであろう」として、フランスの再侵略には望みはないと評価していました。歴史学者のバーバラ・タックマンは、アメリカがヴェトナム民主共和国の独立を無視し、フランスの再

---

<sup>6</sup> ホー・チ・ミンの手によるこれらの手紙は以下のサイトで読むことができます。“Message to America: The Letters of Ho Chi Minh.” <http://www.historyisaweapon.com/defcon2/hochiminh/>

<sup>7</sup> 史料調査の中で、興味深いことに、1945年10月に「ヴェトナム・アメリカ友好協会」が設立されたことを知りました。最初で最後の会合であったようです。



侵略を容認してしまったことは、「愚行」の歴史の一端示すものであると以下のように述べています。

大部分の情報が望みはないという大義に合わせて政策を立てるのは愚行である。……対案は存在していたし、実行可能だった。すなわち、独立運動の側に立ち、必要なら支持さえ惜しまぬことによって、アメリカが西側諸国間の羨望すべき首位の座を獲得し、アジアにおける友好の基盤を確認すればよかった。……インドシナでこの対案を選ぶには想像力が要った……<sup>8</sup>。

付言しますと、事情も時代も異なりますが、中東諸国からの市民の一時入国停止の措置も「実効性がないと」考えられているのに提案されており、タックマンのいう「愚行」にあたると考えることができます。

ヴェトナムの話に戻しますと、その後、ヴェトナムは約30年間にわたって戦乱の中に置かれることになります。1946年12月からのフランスの再侵略の本格化、1949年10月の中国革命と1950年6月の朝鮮戦争勃発を経て、アメリカが1950年5月にフランスによる「インドシナ戦争」への経済的・軍事的援助の開始したことで、植民地主義と「冷戦」の力学が脱植民地化を望むヴェトナムの民族解放への重圧として圧しかかり、その後、アメリカは「冷戦」の論理をもとにヴェトナムにおいて「アメリカの戦争」を戦うことになるのです。

#### （4）ホー・チ・ミンの若い時代におけるアメリカ滞在

以上の歴史的経緯と関連させて、余談的なことを申します。前述のようにホー・チ・ミンは自国の独立宣言に「アメリカ独立宣言」を引用し、サンフランシスコでの国連創設会議に言及し、しかもトルーマン宛の手紙を自ら英語で書いています（タイプ打ちのものですが）。このことは、彼が近代政治思想をはじめ歴史に造詣が深く、しかも高い英語の運用能力を身につけていた人物であったことを物語るものです。

興味深いエピソードなのですが、ホー・チ・ミンは若い時代に短期間ですがアメリカに滞在した経験があり、この経験が英語を理解する素養をホー・チ・ミンに与えたと思われることです。ホー・チ・ミンは1911年6月5日にフランス船の見習いコックとしてヴェトナムを離れ、アフリカ各地を訪問後、1912年12月から約1年間、ニューヨーク市近郊やボストンに滞在しました。ボストンでは、由緒あるオムニ・パーカー・ハウス・ホテル（Omni Parker House Hotel）のベーカリーで働いたと言われています。その後、イギリスのロンドンに移り住み1917年にはフランスのパリに移ります。ロンドンでは学校の雪かき夫、ボーイ

---

<sup>8</sup> バーバラ・タックマン『愚行の世界史—トロイアからヴェトナムまで』（朝日新聞社、1987年）、272頁。

ラーメン、ホテルのレストランでコックとして働きました<sup>9</sup>。

### 3. ヴェトナム戦争の一つの遺産に学ぶ―「他者」への共感 (empathy)・眼差し

#### (1) トランプ政権下の政治世界と「言葉」の劣化

次の話題「ヴェトナム戦争の一つの遺産に学ぶ」に移らせていただきます。昨年の大統領選挙では民主党予備選挙でサンダースが健闘し、トランプ大統領の就任式翌日には、トランプの大統領選挙中の女性蔑視の発言をもとに今後を憂慮して、「女性のためのワシントン行進」(Women's March on Washington)が行われ、若者や草の根の運動が高まっているようです(首都ワシントンでは単独のデモ・集会としてはアメリカ史上最大の約50万人が参加し、全米各地とロンドンやパリにも広がり、連帯するイベントは670以上にのぼり、全世界で数百万人が参加したと言われています)。

こうした中でも、トランプは大統領選挙中から過激な言動によって国民の不安や怒りを取り込む手法で大衆の感情をいたずらに刺激し、政治の世界での言葉のやりとりが劣化しつつあることが憂慮されています。「他者」への共感 (empathy)・眼差しや寛容な心をもとにした民主主義的な感情をどう大切にしていかが問われています。

#### (2) ヴェトナム戦争時の反戦運動、マイノリティの覚醒と「他者」への共感へ

振り返れば、ヴェトナム戦争期においては、アメリカ国内で広範囲にヴェトナム戦争批判が高まり、アメリカ史上最大の大衆レベルでの反戦運動が展開されました。もとより、反戦運動が高まったのは米兵の戦死者の増大や徴兵制のもとで徴兵され「自分の命」が失われることへの不安からでした。しかしながら、反戦運動の中で、戦争の「暴力」に抗して「人間らしさ」や草の根的な民主主義の大切さが強調され、黒人や先住民、女性などマイノリティの覚醒を促してアメリカ社会のあり方が問われことが注目されます。そしてリベラル派やラディカルな人々の間では当時アメリカと対峙していた南ヴェトナム解放民族戦線を支持することやヴェトナム民衆の犠牲への着眼を通して国境を超えた「他者」への共感が生れたことは、歴史上重要な意味を持ちました。

トランプ政権発足という状況の中で「他者」への共感 (empathy)・眼差しや寛容な心をもとにした民主主義的な感情を育むことが大切になっている中で、ヴェトナム戦争期における戦争批判の動きが問いかけたことに立ち戻って考えることは意味があると思います。ここでは、こうした具体的な事例として二つのことをお話しします。一つはトム・ヘイドン (Tom Hayden) がヴェトナム反戦・平和運動の記憶継承に向けて努力している姿ついて、そ

---

<sup>9</sup> ホー・チ・ミンのアメリカならびにイギリス滞在については、古田元夫『ホー・チ・ミン―民族解放とドイモイ』(岩波書店、1996年)、45頁参照。

して、二つ目に、キング牧師が 1967 年 4 月 4 日、ニューヨークの Riverside Church において行った「ヴェトナムを超えて」と題する演説に思いを馳せることにしたいと思います。

### (3) トム・ヘイドン<sup>10</sup>のヴェトナム反戦・平和運動の記憶継承に向けた努力

一昨年の 1975 年にヴェトナム戦争終結から 40 年目を迎えました。アメリカ国内ではヴェトナム戦争観にも一定の変化が見られ、またヴェトナム戦争中の戦争批判の動きがアメリカ国民の間で記憶に残っているかと言えば、そうでもないようです。

アメリカのヴェトナム戦争観の一定の変化を表すものとして、イラク戦争から 10 周年の 2013 年に行われたギャラップの調査があります。イラク戦争のみならずヴェトナム戦争についても「戦争が誤りであったかと思うか」と聞いているのですが、「ヴェトナム世代」である 65 歳以上では「誤りである」が 70%なのに対し、若い世代の 18 歳から 29 歳では「誤りではない」が過半数を超えて 51%になっています。この数字は、若い世代の間で “Bad War” としてのヴェトナム戦争認識が希薄になっていることを示しています。

ヴェトナム戦争中にアメリカ国内ではアメリカ史上最大規模の反戦運動が展開されました。こうした戦争批判の歴史がアメリカ国民の間で希薄になっていることを憂慮していた一人が当時ヴェトナム反戦運動を担った「アイコン」的存在であるトム・ヘイドンです。

トム・ヘイドンについては私たちの会の「名古屋フルブライト・アソシエーション」現会長で相山女学園大学の塚田守先生が関心を持っておられますので、塚田先生から話していただいたほうがよいのですが、トム・ヘイドンについて簡単に紹介します。

ヘイドンは 1960 年にミシガン大学で創設された学生運動組織「民主的社会を求める学生」(Student for Democratic Society、SDS) を担ってきた一人で、60 年代にはヴェトナム反戦運動の中心的存在として活躍しました。その後、1982 年から 2000 年までの 18 年間はカリフォルニア州議会議員を歴任しています。女優のジェーン・フォンダと結婚したことで有名でもあります。残念なことに昨年 10 月に亡くなっています。76 歳でした。

トム・ヘイドンは晩年、ヴェトナム反戦運動が「公的記憶」から消えつつあることを龍慮していました(次ページ写真上中央が晩年のヘイドン)。ヘイドンは、この要因としてアメリカ国内での好戦的な国民意識やヴェトナム戦争を導いた、敵を悪魔化する思考やメディアによる世論操作が依然として根強くあることを指摘しています。そこで彼は、2015 年の 5 月 1 日と 2 日の日程で首都ワシントンにて “Vietnam: Power of Protest” と題する集いを企画します(次ページ写真右がこの企画ポスター)。

---

<sup>10</sup> ヘイドンの近著として以下参照。 *Hell No: The Forgotten Power of the Vietnam Peace Movement* (Yale University Press, 2017) .



ヴェトナム戦争批判の最初の動きを年表風に言いますと、学生を中心とした戦争批判の運動は、アメリカが戦闘部隊をヴェトナムに派遣した直後の3月24日から25日にかけてミシガン大学で行われたティーチイン（Teach-in）集会から始まると言われています（約3,000名が参加）。そして、その翌月の4月17日にはSDS主催の反戦集会が首都ワシントンで開催されます。この集会は、即時停戦と米軍引き揚げを求めて約25,000名が集い、それまででアメリカ史上最大の反戦集会となりました。2015年におけるトム・ヘイドン主催の企画は、1965年4月17日開催された最初の大規模反戦集会から50周年を記念して開催されたのです。

トム・ヘイドンがこの企画に期待したことは、現在進んでいるヴェトナム反戦運動の「歴史の抹殺」（historic cleansing）に対抗して、平和運動が当時持っていた力（Power）

を記憶に留めることにありました。そこで、彼はこの企画にあたって当時ヴェトナム反戦・平和活動で重要な役割を果たした人に参加してもらえるよう組織し、反戦・平和活動家のReunionを意図したのでした。2日間の企画ではこれら活動家が参加して数多くのパネルが組まれたようです。プログラムをしてみますと層々たる顔ぶれで、歴史家のStauton Lynd, やDaniel Ellsberg, Tod Gitlinなど約50人が参加しています。

ここで平和運動が持っていた力ということでヘイドンが想起していることは、もし1968年にキング牧師とロバート・ケネディが暗殺されていなかったならば、自分たちは一時的だとしても団結でき、戦争を終わらせることができたかも知れず、今、この歴史から何を学ぶかという点に関して言えば、当時団結できなかったものの、今、団結することで新たな歴史を創造できるかどうかがかが問われているというものです。

#### (4) ヴェトナム反戦運動におけるキング牧師の役割

##### (4) -1 反戦運動の Power の記憶とキング牧師の位置

そして、トム・ヘイドンがヴェトナム反戦運動の記憶を継承するうえで重要だと考えたのがキング牧師の役割です。前ページにある 50 周年の企画のポスターにもキング牧師の姿が掲載されています。ヘイドンは、キング牧師は非暴力運動を進めた人物として記憶されるきらいがあるが、重要なことは、彼が人種平等や正義、経済的貧困に向けて闘ったと同時に、ヴェトナム反戦の立場を毅然ととったことを記憶に留めることだとしています。

ヘイドンは、当時『ニューヨーク・タイムズ』など主要紙がキングが反戦的な立場を鮮明にしたことを批判したばかりか、キング牧師自身が脅迫のもとに置かれたことを想起すべきだとしています。そこでヘイドンは、50 周年の企画の際に首都ワシントンにある Martin Luther King, Jr. Memorial で祈りを捧げ、キング牧師はアメリカのみならず、世界を射程に入れて平和、正義、市民権擁護のために闘ったのであり、こうしたキングの真の姿が毎年、学校の教科書や授業で語られることをヘイドンは期待したのでした。

##### (4) -2 キング牧師の反戦的立場を象徴としての Riverside Church で演説

さて、キング牧師の反戦的立場を簡単に紹介したいと思います。キング牧師の反戦的立場を象徴的に示すものが、1967 年 4 月 4 日にニューヨークの Riverside Church で演説した、“Beyond Vietnam” という非常に格高い演説です（下記写真参照）。日本では「ベトナムを越えて」と題して雑誌『世界』1967 年 10 月号に紹介されています。



この演説の中でキング牧師が語っている点で重要なことは以下の三点です。

第一は、黒人は法的な市民権は確保されたものの、いまだ貧困にあえいでおり、この貧困者がヴェトナムの最前線に派遣されていることを批判しています。

第二に、今日重要になっている他者への「共感」に関連して言えば、ヴェトナムの民族的抵抗に共感を鮮明に打ち出し、さきほど述べたヴェトナム民主共和国独立の意味とその後の歴史におけるアメリカの責任を問いて正しています。この点で演説では次のように述べています。「1945 年以来（1945 年はヴェトナム民主共和国が独立を宣言した年）9 ヶ年の間、

我々はヴェトナム人の独立の権利を拒否してきた。9カ年の間、我々はヴェトナムを再び植民地化しようとするフランスの無益な努力に手を貸してきたのである。」

第三に、アメリカにおける「価値革命」を訴えていることです。キング牧師は演説の中で「我々は『物を中心とした』社会から『人を中心とした社会』への転換を急速に開始せねばならない。……金儲けや私的財産権が人間よりも大事なことと考えられているうちは、人種主義、唯物主義、軍国主義という三大悪を絶対に克服できないのである。」トランプ政権のアメリカで排外主義が広がりかねず、軍事大国化が目指されているだけに、キングがここで訴える「価値革命」は依然としてアメリカでは「未完の課題」であると言えます。

### III 「ヴェトナム戦争の時代」の未完の課題とトランプ政権の対応の行方

三つ目の話として、「ヴェトナム戦争の時代」の未完の課題との関りに限定してトランプ政権の行方について考えているところを述べ、話をしめくくらせていただきます。

以下、二点について話題提供させていただきます。今から 42 年前の 1975 年 4 月にサイゴンが解放されて米軍が顧問を含めて最終的に撤退し、翌 1976 年にヴェトナムはヴェトナム社会主義共和国として民族統一を成就したという点では、歴史上ヴェトナム戦争は終わったと言えます。しかし、以下述べます二点に関して共通して申したいことは、「ヴェトナム戦争の時代」が提起した問題は「未完の課題」となっており、この意味では「ヴェトナム戦争は終わっていない」ことを示していることです。

#### 1. 「9.11」以後の「対テロ戦争」と「ヴェトナム戦争の時代」の未完の課題

第一は、「9.11 同時多発テロ」以降、トランプ政権下でも対外政策の優先事項と位置付けられている「対テロ戦争」に関連してのことです。

ヴェトナム戦争はアメリカにとって史上初の「敗戦体験」でした。しかし、ヴェトナム戦争終結以降、ヴェトナム戦争における教訓はアメリカの対外的軍事介入を縮小する方向には活かされることなく、対外的軍事介入を忌避・警戒する意味での「ヴェトナム症候群」の克服が目指され、1991 年の湾岸戦争を経て「9.11」後には軍事力に依存する姿勢をより強めてきました。現在、アフガニスタンやイラク、シリアなどでアメリ主導の「対テロ戦争」が継続し、とくにアフガニスタンにおいては、トランプ政権下でも約 8,400 人の米兵がなおも駐留し、アフガニスタンにおける「アメリカの戦争」は、ヴェトナム戦争を上回って、17 年間におよぶアメリカ史上最長の戦争になっています。

「テロ」の温床と根源はグローバリゼーションのもとで生み出される中東地域をはじめとする世界諸地域における貧困などの「格差」や抑圧的状况に起因し、対称療法的な軍事力優先に対応によっては「テロ」の温床や根源を根絶することは不可能であると言われていす。この意味で、ヴェトナム戦争が回避できた最初の「失われた機会」、すなわち第二次世界大戦終結後の植民地主義の退却を象徴したヴェトナム民主共和国の成立とその時代のホ

ー・チ・ミンのメッセージの歴史的重みをアメリカが等閑視し、むしろ植民地主義のフランスのヴェトナム侵略に道を開いたという「歴史の愚行」を想起し、現実を直視した解決の道を探ることで、「歴史の愚行」を繰り返さないことの大切さを感じる次第です。

## 2. ヴェトナム戦争の記憶ならびに米越和解の現状との関連で

第二は。第一とも関連しますが、オバマ政権下で進められてきたヴェトナム戦争をめぐる「公的記憶」ならびにヴェトナムとの和解がトランプ政権下でどのように展開するかに関心を持っています。

オバマ政権は2012年からヴェトナム戦争終結50周年にあたる2015年までの13年間の射程で、ヴェトナム戦争で戦った米兵士を讃える目的で「ヴェトナム戦争50周年コメモレーション」(The Vietnam War Commemoration)を進めてきました。この目的は、約5万8,000人の米兵戦死者と約1,600人の行方不明者を含めヴェトナム戦争に派遣された延べ300万人の元兵士ならびにその家族に対して敬意と称賛の意を伝えることにあります。ヴェトナム従軍兵士を称える言説は戦争終結後の歴代政権が唱えてきたものです。

すでに言及しましたように、キング牧師はヴェトナム戦争時の反戦的演説の象徴とも言えるべき「ヴェトナムを超えて」と題する演説の中でアメリカ政府に対して戦争拡大への責任を問い正したのですが、こうした認識の背後にあったのが、ヴェトナムの民族的抵抗と戦争によるヴェトナム人犠牲者への眼差し、言い換えれば、「他者」への「共感」でした。しかしながら、アメリカ国内で進められている「ヴェトナム戦争50周年コメモレーション」が示していることは、ヴェトナム戦争終結から40年以上経た現在、米兵以上の規模で多大な犠牲を被った、軍人・民間人を合わせて約300万人にのぼる「他者」＝ヴェトナム民衆の犠牲については視野の外にあることです。そして、この間、2000年にヴェトナム戦争終結後に現職の大統領としては初めてクリントンがヴェトナムを訪問し、2016年5月にはオバマ大統領が訪越するなど、とくに2000年以降、両国間の政府レベルで経済・安全保障面で関係緊密化が図られ、しかもヴェトナム戦争中に米軍が使用した枯れ葉剤散布にともなう土壌汚染除去が一定進展するなど、米越両国の政府レベルでは和解が進展していると言えるものの、アメリカ政府はヴェトナム人枯れ葉剤犠牲者への補償は何らの措置も講じていない状況にあります<sup>11</sup>

---

<sup>11</sup> 2004年1月にヴェトナム枯れ葉剤被害者協会(Vietnam Association of Victims of Agent Orange/Dioxin, VAVA)と枯れ葉剤被害者が原告となり枯れ葉剤を製造したダウ・ケミカルなど米化学会社38社を相手に損害賠償集団訴訟を起こした。この訴えに対して、最終的には2009年3月に米最高裁が下級審の棄却判決を支持したことから、事実上審理が閉ざされた結果となっている。

以上のことは、ヴェトナム人犠牲者にも眼差しを向けてヴェトナム戦争を記憶し、ヴェトナム人犠牲者への補償を射程に入れた意味での「アメリカとヴェトナムの和解」は引き続きの残された課題となっていることを示しています。したがって、「他者」への共感の眼差しを生み出す契機となったヴェトナム戦争期におけるアメリカの反戦運動の記憶が継承され、しかもその遺産がどう受け継がれていくか、今後注目したいところです。

### 3. 引き続く民間人の犠牲への着眼―「ヴェトナム戦争の時代」の教訓と遺産が語りかける「歴史の知恵」に学ぶ

最後に一言だけ付け加えさせていただきますと、「他者」への共感という点では、2001 年以降の「対テロ戦争」においてアフガニスタンやイラクなどにおいても多くの民間人犠牲がもたらされてきた現実があることです。ブラウン大学国際・公共問題ワトソン研究所 (Watson Institute , International & Public Affairs,) がまとめた *Human Costs of War, Direct War Death Toll in Iraq, Afghanistan and Pakistan since 2001* (2015 年 8 月) と題する調査報告書によれば、アフガニスタンやイラク、そしてパキスタンにける米軍の死者総数が 6,846 人に対して民間人の死者は、兵士の死者数をはるかに上回り、イラクでは約 13 万 7,000 人～16 万 5,000 人、アフガニスタンでは約 2 万 6,000 人に及んでいます。

(下記表参照。「テロが『戦争』を変える」『朝日新聞』Globe 2016 年 4 月 3 日より抜粋)

## 「対テロ戦争」の死者

戦闘による直接の死者の数、2001年10月～15年4月、ブラウン大学の資料から

	アフガニスタン	パキスタン	イラク	合計
米軍	2357		4489	6846
米企業関係者	3401	88	3481	6970
現地の軍隊と警察	2万3470	6212	1万2000	4万1682
同盟国などの軍	1114		319	1433
民間人	2万6000	2万1500	13万7000 ～16万5000	18万4500 ～21万2500
敵対勢力の兵士	3万5000	2万9000	3万6400	10万400
メディア関係者	25	58	221	304
NGO関係者	331	91	62	484
合計	約9万2000	約5万7000	約19万4000 ～22万2000	約34万3000 ～37万1000

アメリカが挫折を経験したヴェトナム戦争が終結してから今年 2017 年で 42 年目、トランプ政権下では、ヴェトナムでの挫折から立ち直った形で「力による平和」の外交政策が継続され、「テロとの戦い」のもとで他国では多くの民間人犠牲が生み出されていることがアメリカ国内においては等閑視される傾向にあることは否定できません。

したがって、「力による平和」の限界と「他者」への共感の大切さを提起した「ヴェトナム戦争の時代」が「過ぎ去った過去」にならないよう、「ヴェトナム戦争の時代」の教訓とその遺産が語りかけている「歴史の知恵」に立ち戻ることが大切になっていると言えます。

ご清聴ありがとうございました。



### 第3章 日本人歴史家が英語で米国概説史を出版する試み——22年間の個人的苦闘の軌跡と新たな研究課題への挑戦

川島正樹（南山大学アメリカ研究センター長）

名古屋フルブライト・アソシエーション例会で講演する南山大学川島正樹教授  
（2017年7月15日、椙山女学園大学）



はじめに——なぜ英語版アメリカ史概説書の出版にこだわったのか？

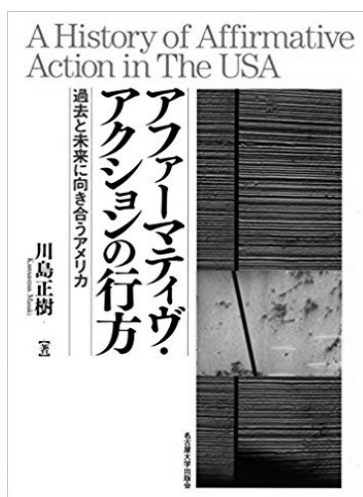
本日は土曜の午後の貴重なお時間を頂きまして、まことにありがとうございます。当時のフルブライト中部同窓会で、もう13年も前ですが、2004年6月11日金曜日に南山大学で、当時博士論文としてまとめている最中の、数年間アメリカ各地で行ってきた人種差別撤廃闘争の元活動家への多くのインタビューを交えた研究活動についてお話しさせていただいたことがございます（The Fulbright Chubu, No. 15 参照）。私こと、昨年末に長年の夢だった「人種」問題に特化した少々癖のあるアメリカ史概説書を英語で英米系メジャー出版社から刊行することができました（Kawashima, Masaki. *American History, Race and the Struggle for Equality: An Unfinished Journey*. Singapore: Palgrave-Macmillan [Springer-Nature], January 2017, 300 p.）。本日は同じようなお考えをお持ちの方に少

しでも参考になればと思い、私のつたない経験についてお話しさせていただきます。

まず、個別テーマを深く掘り下げた研究書ではなく、概説書、それも英語版の出版にこだわった理由について述べさせていただきます。ふつうは前者の方が格上と考えられます。でも、定年が秒読みとなりつつある私としては後述の理由もあり、なんとか一度は自分の歴史観を前面に出したアメリカ史の概説書を、しかも英語で出したいとの思いが年々募りました。その思いを後押してくれたのが、2013年5月に南山大を訪れた、現在はカリフォルニア大学アーバイン校教授、当時はオハイオ州立大学准教授だった、台湾系アメリカ人歴史家ジュディー・ウー氏でした。私が「人種」に焦点を当てた日本語のアメリカ史概説書の出版を考えていることを明かすと、ぜひ英語でも出版するように、と強く勧めてくれたのです。私は密かに英語版の執筆も決意したのです。

1. 日本人にとってのアメリカ研究の意義とは？——二人のアメリカ研究の泰斗の嘆き

まず私は日本語版の執筆に集中しましたが、概説書執筆の動機となり、また揺らぎがちな私の心を支えたのは、日本におけるアメリカ研究の分野で私が敬愛してきた二人の泰斗の同じ嘆きでした。一人目は北海道大学名誉教授、東京大学元教授、現在は北海道商科大学教授をされている古矢旬氏がアメリカ学会会長に就任した際に



同学会ニューズレターに掲載された「新会長挨拶」（『アメリカ学会会報』、No. 179、2012 年 6 月、2 頁）です。アメリカ学会の会員は 1947 年にその前身が創設された際にはわずか 25 名にすぎなかったのですが、現在 1,200 名を数え、組織的には我が国有数の学術組織に発展したのは確かです。

しかし、同時に留意しなければならないのは、このような組織としての拡大や研究成果の増加が、それだけで我が国の『アメリカ研究』の発展や、それに対する本学会の寄与の大きさを意味するわけでは必ずしもないという点です。というのも、上述の優れた研究成果の中には、狭義のアメリカ研究とは別の専門的学術分野——政治学、経済学、社会学、人類学、心理学、文学等々——で発想・構想され、達成された業績が少なくないからです。それらは、そうした分野でたまたま「アメリカ」という地域に素材を求めた結果、「アメリカ研究」の成果として本学会に認定された例と言えましょう。言い換えると、「アメリカとは何か」という従来の「アメリカ研究」にとって不可避の問いかけを迂回する研究、迂回しても優れたアメリカ論を含む研究が、数多くみられるようになっています。このような学術の専門分化が進む時代に、アメリカ研究はどのようにユニークな学術的貢献をなしているのかを真剣に考えることが、本学会の将来にとり大事な課題となっているように思えます。

アメリカ本国における研究を凌駕しうる研究水準の向上には目をみはるものがある一方、表面的発展の水面下では、「学際性」を謳った「総合的地域研究としてのアメリカ研究」のゴールが見失われている、という嘆きです。

もう一人は私の大学の先輩でもある大阪大学元副学長で現在は京都外国語大学学長をされている松田武氏です。冒頭で「漂流する日米安保」の意義を「問い直す気概」を求める斎藤真氏の言葉を引用し、「日米関係はどうあるべきか」というような「ラージ・クエスチョン」を忘れるな、と同じくアメリカ学会のニューズレターで提言しています（『アメリカ学会会報』No. 190、2016 年 4 月、1 頁）。

地域研究は学際的な手法により特定地域の「現状」を全体的に理解することを主眼とする。その究極的な目的は、特定地域の理解にとどまらず、研究を通して得た知や理解を実践的に活用することにある。米国理解という知的好奇心の満足にとどまらず、理解と知を基に太平洋を挟んだ重要な隣国である米国とどう向き合い、付き合っていくかを追究することが、地域研究の一つでもあるアメリカ研究の究極目標であるといえよう。

昨年秋の大統領選挙で、戦後のアメリカが従来良きに悪しきに維持してきた世界的な役割へのコミットメントを自ら放棄して、普通の国並みに自国利益追求のみを意味する「アメリカ・ファースト」を主張してはばからない人物が大統領に選ばれました。トランプ政権が誕生した今こそ「アメリカ」の意味を問い直し、日本、そして世界はアメリカとどう付き合

うべきかが求められています。まさにこの点で、二人の泰斗の嘆きは実に現在のアメリカ内外のアメリカ研究分野の研究者が本来的に目標とすべきことを先取的に提言していたというべきです。私はこの二人の嘆きに大いに触発され、アメリカが本来の「アメリカ」により近づいてほしいとの思いを込めて、英語でのアメリカ史概説書の出版を思い立ちました。

## 2. 苦闘の個人的研究史——1990年代～2000年代の米国現地での調査活動

次に私がフルブライト若手研究員としてボストン・カレッジに滞在研究をして以来の苦闘の22年間について簡単にまとめます。京都大学文学部史学科現代史専攻の今津晃先生のもとを卒業後、千葉県立千葉高校定時制の英語教員となり、3年後に立教大学大学院で富田虎男先生の下でアメリカ史研究を再開させた私は、何とか博士課程を終え、1990年3月に11年間務めた高校の英語教員の職を辞し、同年4月から椙山女学園大学を振り出しに大学教員となり、アメリカ研究、とりわけアメリカ史を教える身となりました。まもなく三重大学に転任し、フルブライト若手研究員に採用され、1995年から翌年にかけて家族共々ボストン郊外の当時は住民の大半がカトリックの白人エスニック系労働者階級の町ウォータータウンに住み、いわば家族ぐるみで移民体験を重ねながら、1970年代半ばの「バス通学」論争に関する現地でのフィールドワークを主とした滞在研究をする機会に恵まれました。

「バス通学 (busing)」とは、南部以上に厄介な北部大都市の「人種」をめぐる差別と隔離の問題に果敢に挑戦した裁判所の判決実行命令を伴う方策でした。南部のような州法や自治体条例といった地方法体系で強制された「ジム・クロウ」と呼ばれた「人種」に基づく「法による (de jure)」差別的隔離と違って、北部の大都市中心部ではいわば地域社会的慣習の圧力による居住区の「事実上の (de facto)」隔離が行われおり、「ゲットー」と呼ばれた黒人居住区の学校はどこも劣悪な条件を強いられていました。そのような「人種」をめぐる隔離状況を改善しようとして、白人地区と黒人地区の双方の生徒をスクールバスで送迎輸送して両地区の学校の生徒の「人種」の割合を均衡させることにしたのです。

白人といっても市内の中心部に残っていたのは下層労働者階級のアイルランド系を主とした「非ワस्प (non-WASP)」であり、すでに「ワस्प (白人アングロサクソン系プロテス



タント教徒のエリート層)」を主とした富裕層や中産階級の白人は郊外の白人だけの自治体で平穩に暮らし続けていました。いわば奴隷制と奴隷貿易以来「人種」をめぐる差別や搾取で潤ってきた人々に代わってその「つけ」を支払わされることになったアイルランド系を主体としたボストン市内に残留した下層白人住民は、裁判所による「バス通学」命令を機に長年募らせた怒りを爆発させたのです (写真参照)。

外見上も明らかな部外者としての「中立的な立場」を利用して、私は黒人地区と白人地区の両方に入ってインタビューすることができ、またフルブライターとしての地位も活用し



てアーサー・W・ギャリティ元連邦地裁判事（写真参照）やケヴィン・ホワイト元市長、ロバート・C・ウッド元連邦住宅都市開発長官などに面談するなど、貴重な証言を得ることができました。私が敢えて日本ではあまり知られていなかった、アメリカでは珍しいカトリック系の大学であるボストン・カレッジの所属を選んだ理由も、ボストンの権力構造を支えていたのがアイリッシュで

あり、人脈を手繰るうえで何かと有利であろうという期待があったからでした。また黒人コミュニティには、その前年の1994年の夏に当時の米国文化交流庁（USIA）が後援してボストン・カレッジで開催された1ヵ月半にわたるアメリカ研究の国際的なセミナーに日本代表となって参加した折に、つながりができていました。そのような甘い目論見は確かにかなりうまくいきましたが、ときに挫折を強いられたのも事実です。たいていの場合に私は黒人と白人の両陣営から怪訝な目を向けられるのみならず、「日本には貴方が関与すべき問題があるだろうに、なぜよその国の解きたい問題におせっかいにも首を突っ込むのか」と非難されることもありました。そんな折に、私は苦し紛れに「もちろんその通りですが、私は日本では当事者ですから、日本の問題を客観的に見ることは出来かねますので、ぜひアメリカの研究者に研究して頂きたいです」と言い逃れる術を見出しました。同時にそれは、英語で成果の発表をすることを私自身に義務付けることにもつながりました。帰国直後に南山大学アメリカ研究センター創立20周年記念のシンポジウムで英語で発表し、ゲスト・コメンテーターの著名な政治学者ロバート・ウィービー教授から高く評価され、翌1997年に *Nanzan Review of American Studies* に英語論文として掲載されました。南山大学アメリカ研究センターのウェブページ上でPDF版がダウンロード可能です。

その後1998年から2003年までの5年間に科学研究費補助金を得て、市民権運動（the Civil Rights Movement）のかつての活動家の「今」を訪ねる旅をミシシッピ、アラバマ、アーカンソー、ジョージアといった南部各地と、シカゴなどの北部都市の「犯罪多発地区」と言われる貧しい「ゲットー」と呼ばれる黒人居住区を回り、1960年代の運動の「その後」について現地訪問を重ねながら見聞し、「運動は終わったわけではない」と実感しました。それについては13年前にこの会で報告し、同年の *Nanzan Review of American Studies* にも論文として掲載し、最終的には2005年に京都大学に博士論文として提出し、2008年に名

大出版会から刊行しました。その活動の最中にシカゴで将来の大統領バラク・オバマ氏に当初の約束の二倍の1時間のインタビューをする機会を得ました（写真参照）。翻訳を出版したご縁で知己を得た彼のシカゴ大学時代の相談相手でその後ハーヴァード大学ケネディ行政大学院に移った社会学者ウィリアム・J・ウィルソン教授の紹介でした。一番手ごわい相手は誰かという私の質問への「ブラックパワー政治家」という答えが印象に残っています。それは、彼が弁護士の際ら州議会上院議員の一期目だった 2002 年 8 月 30 日のことでした。



政大学院に移った社会学者ウィリアム・J・ウィルソン教授の紹介でした。一番手ごわい相手は誰かという私の質問への「ブラックパワー政治家」という答えが印象に残っています。それは、彼が弁護士の際ら州議会上院議員の一期目だった 2002 年 8 月 30 日のことでした。

今でも一番心に残っている人物は同じくシカゴで出会ったリチャード・バーネット氏です。彼は

黒人ゲットーのうちでも比較的に富裕層が居住するサウスサイドと比べて「アンダークラス」と呼ばれる無職者が集中するウェストサイドの中心居住区ノースローンデルで地域



改善活動に従事していました。ゲットー外の地元の人は決して訪れないところです。あまり知られていない事実ですが、1964 年の市民権法と翌年の投票権法で南部の「ジム・クロウ」の解体という初期目的を果たしてノーベル平和賞にも輝いたキング牧師が短すぎる晩年の主たる活動地として選んだのがバーネット氏の家の近所でした。バーネット氏はいわばキング牧師の遺志を受け継いでいたのです。バーネ

ット氏の案内でかつてのキング牧師の活動拠点を訪れましたが、そこにはただ「風が吹いているだけ」で衝撃を受けました（写真参照）。キング牧師の活動を引き継いだのはブラックパンサー党の若者たちでしたが、彼ら彼女らの無料食料配布や医療支援の活動は武装警察隊によって弾圧され、活動家の多くも殺されました。ただし、私のかつての院生によりますと、同地は今は整備されているとのことですが、それはごく最近のことにすぎません。

### 3. 英語版出版社とのやりとり——出版企画書の作成と売り込み

博士号を授与され、その後に名古屋大学出版会から書物として刊行もできたのですが、心残りが一つありました。それは、貴重な証言をいただいた人々の恩に報いていない、という深いやましさに類する思いでした。アメリカ人研究者が入手できなかった様々な情報もいくつか得ることができたのですが、世に広く知らしめてほしいという情報提供者の思いは英語で出版しない限り、実現できないように思われました。ただし、丁度日本語版の出版を果たしたところに引き受けた NASSS（名古屋アメリカ研究夏期セミナー）の準備と企画実行の責任者として、とりわけ企業からの寄付金集めで消耗し尽くしてしまい、2009 年秋学期に

途中から病気休職を余儀なくされたこともあり、英語版出版を試みることはできませんでした。先輩で同僚の藤本博教授のご支援で2010年春に復帰できましたが、体力も気力も損



なわれた私にはこの大部の本を英語に直すことは出来かねました。そのような文脈があったからこそ、先に触れたジュディー・ウー氏の激励が私の心に響いたのです。学者人生の最終目標としていたアメリカ史の概説書を出版するにあたっては必ず日英両語で最初から原稿を準備しようと密かに決意していたのです。それでもあまりの労力の多大さを前に、そもそもどうしてよいかわからず、躊躇していました。ジュディー・ウー氏の後押しがなかったら、たぶんあきらめていたと思います。

原稿ができた段階で、ようやく出版社への具体的なアタックの準備が整いました。まず出版社の選択ですが、日本語版と同じ名古屋大学出版会に打診しましたが、断られました。以前やったこともあるが、日本の会社が英語版を出版しても商売にならないので止めたとのことでした。英米系の大手出版各社に企画書を送り付けましたが、結果は散々でした。唯一興味を持ってくれたのは社会科学系の学術書できわめて評価の高いR社の女性の、お名前から察するにイタリア系の女性シニア・エディターであるキムバレー・グンタ氏でした。彼女はさっそく5名のペア・レビューアの審査にかけてくれました。結果は「書き直しの上で再提出」でした。

5名のペア・レビューアのうち2名の審査結果は両極端でした。一人は「マイナーな修正のみで出版可」で、もう一人は「修正しても出版の価値なし」でした。あとの3名は「修正のうえで出版の価値あり」で、詳細かつ多数の修正箇所の提示も含まれていました。キム・グンタ氏はとてもやさしい人で、私が衝撃を受けるであろうことを予想して、次のような励ましの言葉を送って下さいました。「貴方の書籍原稿で最良の事柄の点の一つは（この米国人査読者が）『外国籍のアメリカ史研究者であるのに、本稿筆者が本件（「人種」をめぐる問題、引用者註）に関する米国の国民的議論に重要な洞察を付加していると信じられる点である』としていることです。（…one of the best things about your book is that “As a foreign national who is a scholar of American history, [the reviewer] believes the author has an important insight to add to our national debate on this issue.”）」

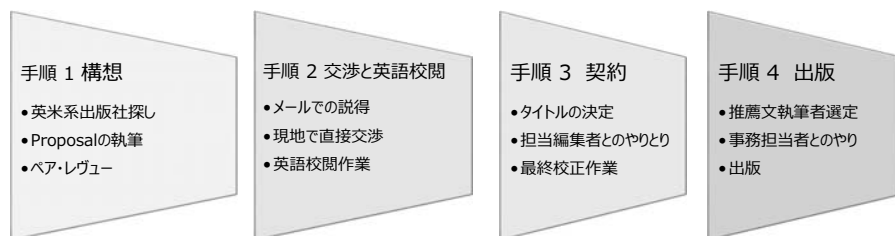
気を取り直した私は翌年3月末をめぐりに完成原稿を送る約束をしました。これが2014年の晩秋の状況でした。

私の完成原稿の送付は連休明けにもつれ込みました。1ヵ月ほど待ってみましたが、音沙汰なしでした。そのうちグンタ氏がチーフ・エディターとして3月末をもってニュージャージーのある大学出版局にヘッドハントされたことが判明しました。締め切りを守ることができなかった私は自分を責めました。そして週末の退社前の時間を狙ってグンタ氏の新たなオフィスに国際電話をかけました。その大学出版局では概説書の出版はやっていないと

のことでした。私は「後任がもうすぐ来るから」という彼女の言葉を信じてさらに1ヵ月待ちましたが、反応がありませんが、まもなく最終的な結論として不採用のメールが来ました。グンタ氏に事情を伝えると、責任を感じたのか、別の会社を紹介されました。詳述は出来かねますが、幹部社員へのアクセス方法などの裏情報も含まれていました。彼女から提示された選択肢の内には、グローバル・アウトリーチ部門を創設して比較的非英語話者の新規市場開拓に熱心と思われる Palgrave-Macmillan 社がありました。以前にはつれないお断りのメールを返されたことがあったのですが、私はさっそくアメリカ以外の、中国を含むアジア太平洋領域での「人種」に焦点を当てた非アメリカ人によるアメリカ史概説書の市場開拓の可能性を強調した企画書を提出しました。ちなみに、いくつかの大手出版社では企画書の提出を義務付けています。R 社もそうでしたし、Palgrave-Macmillan 社もそうでした。ただし、このようなオープンな新刊書企画の募集をしている会社はそれほど多くありません。日本と同様、出版業界はまだまだブラックボックスです。

私は思い切って直接交渉のために 2015 年 8 月末から 9 月初頭に Palgrave-Macmillan 社のニューヨーク支社を訪問することにしました。グンタさんに直接会ってお詫びとお礼を伝えたいとも思っていました。アメリカ行きは実に 9 年ぶりでしたので、妻にも同行してもらいました。ついでに、20 年ぶりでボストンも訪ねることにしました。上司は出張予定でしたが、ニューヨーク支社の若い女性のアシスタント・エディターとメールで連絡を取りながら、9 月初頭に実際にマンハッタン最南部ウォーターフロントの高層ビルに所在するオフィスを訪れました。会見は 20 分ほどでしたが、私の熱意は十分に伝わり、改めて原稿がペア・レビューにかけられることになりました。4ヵ月後にレビューの結果が来ましたが、「英語母語話者の校閲を受けること」が条件とされました。レビューアから英語コピーエディター（英語校閲者）の紹介をしてくれる旨の申し出もありました。

前述および後述の出版までの大まかな手順は図で示したとおりです（下図参照）。



#### 4. 英語校閲をめぐる苦闘——越え難い文化の壁

せっかくチャンスを得たのですが、コピーエディターをどうやって探したらよいか途方に暮れ、先に触れたレビューアに紹介してもらおうかなどと迷っていたころ、2016 年 1 月、アメリカ学会の会員で NASSS でお世話になったこともある南山大学宗教文化研究所の奥山倫明氏から、同研究所が発行する評価の高い英文雑誌のイギリス出身の英語校閲者で日本



研究を専門とし名古屋大学で修士号を取得されて日本語も堪能なデイヴィッド・J・ホワイト氏を紹介されました。いくらインターネットが発達しているとはいえ、直接の話し合いができるに越したことはありません。また概説書においては私の専門分野に近い人物よりも、将来の読者の代表として素人の校閲者のほうがかえって良い意見が得られるかもしれないと思い至り、ホワイト氏をお願いしてみることにしました。私の今回の成功は、ホワイト氏という良き英語コピーエディターとの出会いに多くを負っていると確信します。

実は私には英語校正に関して苦い経験がありました。ジュディー・ウー氏の励ましもあって 2013 年夏休みに決意して始めた英語版の原稿がほぼ完成した 2014 年初頭に、私の友人で米国のノーザン・ケンタッキー大学でアフリカ系アメリカ人研究を講じる、自身もアフリカ系アメリカ人であるマイケル・ワシントン教授と、彼の妻で同じ大学でアジア系アメリカ人に関する表象研究を専門とする桑原泰枝教授に、きわめて安い謝礼で「英語校正」をお願いしました。それは双方にとって当初の予想を超えて大変な作業となり、しばしば内容にまで踏み込む、大変に深刻な論争に発展しかねない事態にも至りました。今まで何度も英語ネイティブ・スピーカーに英文チェックをしてもらったことがある私ですが、その度に味わった辛い経験を上回る、表面的な翻訳作業の難しさを超えた、異文化交流の厳しさを改めて実感しました。当初原稿の「英語校正」はそれでも何とか最後まで終えることができ、その原稿をもとに、前述の R 社や Palgrave-Macmillan 社との交渉が可能になったのですが、苦い経験として脳裏に残りました。

ホワイト氏は英語校正 (proofreading) と英語校閲 (copyediting) を厳密に分けて考える人で、単なる英語の校正は不可能であると考えた人でした。彼は一度私の英文のサンプルを試しに直し、それを私に確認させてから、金銭的な面も含めて契約したい、と申し出てきました。今までかなり嫌な目にあってきたことをうかがわせる対応でした。私も前述の苦い経験のみならず、それ以前にも自分自身英文を英語母語話者に直してもらったり、南山大アメリカ研究センターの英文雑誌である *Nanzan Review of American Studies* への投稿論文の校閲を行ったりしながら、「英語校正」をめぐるいろいろな大変な経験を重ねてきました。単純な文法的な意味に限定した「英語校正」などありえず、しばしば文脈や著者の本質的な思想や価値観に関わりかねない衝突が校正者との間に生じかねないのです。ですから、むしろホワイト氏の誠実さを感じました。さっそく「前書き (Preface)」の原稿を送りました。返送された丹念な校正原稿によってホワイト氏の誠実さのみならず学識と技術の高さも確認できました。また経費の面ですが、自分の経験から業者に依頼すれば 1 語当たり安くても 6 円、カスタム仕様では倍の料金を要求されることが分かっていたので、ほぼ通常仕様の料金でカスタム仕様と同様にやってもらえそうであることが確認できましたし、その上直接面談での相談にもものってもらえるメリットもあり、要求額は極めて合理的であると感じ、契約しました。このように多くの厳しい経験に裏打ちされた覚悟があったにもかかわらず、次に述べますように、英語校閲の作業はかなり面倒であったのみならず、しばしば価

価値観のぶつかり合いにもなりかねませんでした。3ヵ月に及ぶ、英語のみならず歴史認識を含む日英の文化や二人の価値観の違いにまで触れる、格闘の日々が始まりました。

英語校閲は純粋な英語の文法的な、あるいは慣習的な表現上の修正に留められるのか、それとも内容の検討にまで踏み込むのかという点ですが、結論を申せば、文法や用語の選択や言い回し的な慣習と文章の内容は本来的に不可分であり、どうしても価値観に関わる内容の問題にも踏み込まざるを得ない、ということです。見解の相違をお互いに認めるか否か以前に、まず著者としての主張を読者の代表である校閲者に十分理解してもらうことがいかに大変であり重要な作業であるか、ということです。これは日本語での出版の際の編集者とのやり取りでも問題になることで、言語の問題を超えています。膨大な具体的事例についての説明は省かせていただきますが、見解の相違を確認する前提条件を満たす上記の作業こそが重要であり、そのためには、著者にはきちんとした証拠に基づく議論が不可欠であり、しかもできる限り多くの証拠を挙げるべきである、という歴史学に留まらず学問研究一般に通底する基本的態度が求められる、ということです。

メールや電話ではなかなか溝が埋まらなかった私たちはしばしば主にホワイ特氏の研究室で、そして時に場所を変えつつ直に意見交換をしながら、いつしかお互いの今までの人生について明かし合うようにもなりました。ホワイ特氏にはかつて南ローデシアと言われた現在のジンバブエの出身で幼くして故郷を追われるように離れて英国にたどり着いた従兄弟がいてしばしばジンバブエを脱出する際の厳しい経験談を聞かされたことや、ロンドンでお母さまが若い頃に電話交換手をしていた折に偶然アメリカまで国際電話をかけてきたロンドン滞在中のマルコム・Xと会話をした経験など、いろいろと個人的な背景についてお話ししてくれるようになりました。私は中国の文化大革命に大いに影響されつつ学生時代を送っていた時のことなど、今でこそ話せるような若い頃の学生運動に関与した折の体験を明かしました。後から振り返ると、私たちはこの英語校閲作業を通じて、それぞれの人生の中で培われた表面上異なった価値観ないし相互理解のための入り口の違いを超えた、普遍的な基底部分を相互に確かめ合う努力をするようになっていったという意味で、お互いにある種の異文化交流に努めたような気がします。文献資料の渉猟や関係者へのインタビューの分析を基に私の価値観というフィルターを通して再構成したアメリカ像を、アメリカ研究の素人というべき一人の英国人に何とか理解してもらう努力を重ねた経験は、私自身にとって大変にチャレンジングであったと同時に、これまで見過ごしてきた真理への気づきにも満ちた、時間の経過を忘れるほどの持続的意識高揚の中での充実感にあふれる作業でもありました。

2016年春のゴールデン・ウィーク前に原稿が完成し、それを担当のPalgrave-Macmillan上海支店編集部に送付しました。時期的に前後しますが、私の編集担当となったイギリス人女性上級編集者とのやり取りのうちで、特筆すべき二つの経験について以下に述べさせていただきます。

まず名前の表記順です。たかが苗字と名前の順番くらいどうでもよい、と思われるかもしれませんが、名前はアイデンティティの根幹でもあり、国際的な場面ではしばしば問題化します。南山大学アメ研センターが発行する英文学術雑誌 *Nanzan Review of American Studies* では、東アジアの漢字文化圏の他の国々と同じく、姓を前に名を後に、という順で著者名を表記しています。前述の 2007 年から 5 ヶ年にわたって開催した NASSS の折にそのように改めました。それまで KASSS（第二次京都アメリカ研究夏期セミナー）を 10 年間担った前任の立命館大学による 2000 年の国語審議会答申を踏まえた慣行を、NASSS 事務局長として私はアメリカ研究夏期セミナーを引き継いだ折に踏襲することにしたためです。それ以来私は、英語で行われる南山大学外国語学部英米学科の学科会議でも、一貫して Kawashima Masaki の順序で通しています。私は担当編集者（Sara Crowley-Vigneau 氏、以下「サラさん」と呼称します）に、ぜひとも著者名は Masaki Kawashima ではなく、Kawashima Masaki という表記順にしてほしい、とお願いしたのですが、あっさりと断られました。思い余って国際電話をかけて「中国人や韓国人と同じ扱いにしてほしい」と中国や北朝鮮の政治指導者の名前表記順を例に懇願しましたが、サラさんは受け入れてくれませんでした。私は怒りをぶちまけたホワイト先生から説得された次のような言葉を今でもありがたかったと感じています。「そんな些末なことで編集者とけんかして、主要出版社からのアメリカ史概説書の出版という川島先生の終生の夢を実現するまたとない機会をふいにしてはいけません。*Nanzan Review of American Studies* は日本で出版されるので文科省の要請に従い、Palgrave-Macmillan 社からの出版物は英米の慣行に従うのだから問題ないです。」私はホワイト先生の助言に従うことにしました。

もう一つはタイトルでした。私は当初タイトルとして次のような提案をしていました。*America Confronts the Past and the Future: A Concise History of "Race" and the Pursuit of Fairness in the United States* です。ところがサラさんから「本社のスタッフと相談の上で次のように決定した」として一方的に *American History, Race and the Struggle for Equality* というタイトルを伝えられました。まったく取り付く島のないという一方的な通告でした。次善の策としてホワイト先生の意見を取り入れてせめて *An Unfinished Journey in Search of Fairness* という副題を付加してもらえないかとねじ込みましたが、結局サラさんが認めてくれたのは *An Unfinished Journey* という短縮した副題の付加だけでした。私がこだわった“fairness”が説明もなく削られたのは、今でも納得しかねています。たぶん「公正さの追求」があまりにも現実離れしている、と思われたのでしょう。タイトルに関しては日本語版の際にも編集者の意向が極めて強く反映されるという経験を持ちましたが、英語版でも同じでした。

その一方で、契約書に関しては、私のわがままを通させて頂きました。名古屋大学出版会との約束である日本語訳の出版に関する権利を Palgrave-Macmillan 社に放棄してほしいという私の要求を、ほぼその通りに受け入れてもらえました。サラさんはこの点に関して何も

言いませんでした、私は彼女が本社との関係でかなり無理をしたのではないかと推測しています。以上の最終校正をめぐる苦労はかなりのダメージを私に与えていたようで、2016年10月2日日曜日に大腸穿孔による腹膜炎を起こした私は、八事日赤病院で医師をしている三男がちょうど休日救急当番であったこともあり、2週間の絶食入院で危うく命拾いをしました。何とか年末までには出版にこぎつけましたが、私の肉体はぼろぼろの状態でした。

もう一つ幸運だったことがあります。裏表紙の推薦文の執筆者（endorser）に関しては、前述の NASSS の第二回目（2008 年夏）のメイン・スピーカーの一人だった、アジア系アメリカ人研究の分野の第一人者レイ・チョウ（Rey Chow）氏が引き受けて下さいました。私が入院闘病中に編集助手の中国人女性が私の代わりにお願いしてくれたのですが、たいへんに名誉なことだと感謝しております。

## 5. 今夏の計画——結びに代えて

最後に今夏取り組む予定の、おそらくは私の歴史家としての定年前の最後のものとなる研究プロジェクトについて簡単にお話して締めとさせていただきます。先輩研究者で同僚でもある藤本博先生が研究代表をされている、アメリカ研究センターも属す南山大学地域研究センターの共同研究『1968 年』の意義に関する総合的研究——『時代の転換期』の解剖』の一環で、私は来年で 50 周年となるキング牧師暗殺の地となるテネシー州メンフィスで起こった清掃労働者のストライキについて分担研究をすることになりました。



他の大都市と同じくメンフィスでもゴミの回収という過酷な労働を不安定で低賃金の「臨時採用雇員」として担っていたのはもっぱら黒人で、ゴミ回収車の運転士のみが正規雇用で全員白人でした。1968 年 2 月 1 日、降雨の中で回収作業を早めに切り上げようとした白人運転士のミスで 2 名の黒人のゴミ回収労働者が回収車後部のゴミ圧縮装置に巻き込まれて死亡しました（写真参照）。遺族のもとへ市当局から送られたのは弔慰金ではなく、葬儀社からの遺体修復費用などの多額な請求書でした。この「事故」をきっかけに 1,300 人の黒人清掃労働者の怒りが爆発し、自発的ストに発展し、メンフィス市内には未回収のゴミが散乱します。彼らのスローガンは「私は人間だ（I AM A MAN）」でした（写真参照）。キング牧師は清掃労働者のスト支援を「最後の聖戦」と言われる「貧者の行進」のスタートと位置づけ、メ



ンフィスに乗り込んでいきましたが、最初のデモ行進は警察の厳しい弾圧がきっかけで暴動に発展し、一人の黒人少年が警官に射殺される事態に及びました。嵐の吹き荒れる 1968 年 4 月 3 日夜、二度目の抗議デモの指揮を決意してメンフィスを再訪したキング牧師は、翌日の自らの死を予告するかのような有名な「山頂演説 (Mountain-top Speech)」を行いました。



ストはキング牧師の命と引き換えに、全国労組を中心に「人種」を超えた広範な支援を得て勝利するのですが、同年の大統領選挙の民主党有力候補で、キング牧師亡き後の急進的リベラル派の最後の望みの綱であったロバート・ケネディがカリフォルニア州予備選挙で勝利直後に銃撃を受け、6 月 5 日に死亡します (写真参照)。二人の指導者を欠いた「貧者の行進」は惨めな挫折を余儀なくされ、民主党支持勢力は絶望感の中で政治への関

与の意欲を喪失し、分裂してしまいます。まるで昨年の大統領選挙のように、です。秋の大統領選挙に僅差で勝利するのは「法と秩序」を掲げたりチャード・ニクソンでした。こうして「60 年代」は終わるのです。そして最初にお話したように 70 年代以降に「バス通学」や「アフーマティヴ・アクション」などをめぐる深刻な論争が起こり、「人種」をめぐる問題の最終的解決へ向けた国民的合意の形成までもう一息のところまでいきながら、国民の熱意は急速に冷めていき、現在に至ります。



今夏メンフィスを訪れたいと思っているのですが、今は米国国立市民権運動博物館となっている、キング牧師が暗殺された旧ロレイン・モートルとともにぜひとも行ってみたいのは、運動を陰ながら支えた黒人ブルースのメッカであるビール街 (Beal St.) のライブハウスです。メンフィスは黒人音楽のメッカであると同時に、白人でありながらリズム・アンド・ブルースに魅せられ、独自の境地を切り開いて世界的名声をえたエルヴィス・プレスリーが活躍した土地としても有名です。実は私は学生時代に代表的白人音楽であるブルーグラスのバンドを組んでいたことがあります。同じテネシー州



内のナッシュヴィルはその中心的な都市です。もちろん私は黒人ブルースも、先日亡くなったロックンロール創始者として名高い黒人ミュージシャンのチャック・ベリーも大好きです。私の素朴な疑問は、同じ州内でどうして二つの全く異なった大衆音楽の潮流が育まれた

のか、というものです。一方は「人種」の壁を越えた広がりを見せながら、他方はかたくななまでに白人文化としての性格を堅持したままです。私がそうであったように、まずは音楽の分野で「人種」を超えた交流の糸口が見出しうるかもしれません。この二つの大衆音楽の潮流は共にとても個性的であり、かつ魅力に富んでいます。このような長年の個人的疑問点にも答えを見いだせればと願っていますが、まずは無事に旅を終えたいと思っています。

まとまらないままですが、これで私のつたないお話を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(了)

## 4. 会務報告

### 名古屋フルブライト・アソシエーション 2017 年度総会

2017 年 7 月 15 日（土曜日） 椋山女学園大学星ヶ丘キャンパス学園センター507

#### 報告

1. ホームページの更新など
2. その他

#### 議題

1. 2017 年度～2018 年度 役員案
2. 2016 年度（2016 年 4 月 1 日―2017 年 3 月 31 日）の事業報告
3. 2016 年度の決裁報告と監査
4. 2017 年度の事業計画、予算案

1. 2017 年度～2018 年度 役員案

#### 2. 2017 年度事業

- 1) 2016 年 6 月 20 日

講演会 講師：平田雅巳 名古屋市立大学 准教授

題目：「民衆の日米関係史―平連と服部夫妻から学んだこと」

- 2) 2017 年 2 月 18 日 藤本博 南山大学 教授

題目「ヴェトナム戦争の時代」と向き合って考えてきたこと

―トランプ新政権発足後のアメリカの行方にも言及しながら―

3. 2016 年度決裁と監査（別紙 1）

#### 4. 2017 年度の事業計画

- 1) 7 月 15 日（土曜日）総会、講演会（川島先生）
- 2) 予算案（別紙 2）：根本的見直しなど
- 3) ニュースレターについて：川島先生と藤本先生の講演、上田先生の投稿、他、
- 4) ブログの更新と会員からのメッセージの投稿など
- 5) その他

別紙 1

名古屋フルブライト・アソシエーション

2016年度決済

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
前年度繰り越し	48,679		総会案内（6月6日）	26,178	
会費	120,000	3000×40人	講師謝礼	10,000	5,000×2名
懇親会	42,000	3000×14名	アルバイト	8,000	
			講演テープ起こし	16,000	
			サーバー・ドメインの半額	16,254	
			名札	3,639	
			椋山女学園	3,000	
			ニュースレターと例会案内（1月26日）	100,383	合本
			レターバック	360	国立国会会報送付
			レターバック	360	荒川印刷
			懇親会費	40,000	
			次年度繰り越し	-13,495	
計	210,679			210,679	

2016年度収支決済につき、領収書、預金通帳等関係書類によって監査を行った結果、適正である事を認め、ここに報告します。

監事

小坂敦子

2017年7月15日



## 別紙 2

## 名古屋フルブライト・アソシエーション

## 2017 年度事業計画予算

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
前年度繰り越し	-13,495		総会案内（7月15日）	25,668	
会費	120,000	3000×40人	講師謝礼	10,000	5,000×2名
			サーバー・ドメイン	35,748	
			ニューズレターの発行 27号	10,000	
			総会・例会開催費	5,000	
			学生アルバイト	6,000	
			例会案内	10,000	
			次年度繰り越し	4,089	
計	106,505			106,505	

## 名古屋フルブライト・アソシエーション会則

制定 1983年10月 1日

改正 1993年 6月 5日、2009年 5月30日、2012年10月14日

第1章 総則 第1条 本会は、名古屋フルブライト・アソシエーションと称し、英文を Nagoya Fulbright Association と称する。

第2条 本会は事務所を名古屋に置く。

第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発を図り、日米親善および相互理解を増進することを目的とする。

第4条 本会の会員は、正会員、準会員、賛助会員、名誉会員、シニア会員とする。

第5条 1. 正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティーマン

2. 準会員：フルブライト奨学金のグランティーマンで日本に滞在しているアメリカ人

3. 賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者

4. 名誉会員：正会員のうち、本会に特別の貢献をし、役員会の承認を得た者

5. シニア会員：正会員のうち、本人の申し出があり、役員会の承認を得た者

## 第2章 事業

第6条 本会は次の事業を行う。

1. 会員相互の交流、親睦を深めるための活動

2. フルブライトその他の奨学金を受けて渡米するグランティーマンへの指導、援助

3. 日本に滞在するフルブライトグランティーマンの研究活動 および滞在中の生活への指導援助

4. その他日米相互理解を深めるための活動および役員会で必要と認めた事業

## 第3章 総会

第7条 総会は毎年1回開催する。その他役員会で必要と認めた時には、臨時総会を開催することができる。

第8条 総会では、次の事項を行う。

1. 事業報告、収支予算、決算の承認

2. 役員の選出

3. その他の本会運営のための重要事項の議決

第9条 議決は出席正会員の過半数をもって成立する。

第4章 役員 第10条 本会には、会長1名、副会長若干名、幹事若干名、監事を置く。

第11条 任期は2年とし、役員の再選を妨げない。

第5章 会計 第12条 本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。 第13条 正会員の年会費は 3,000 円とする。

名誉会員およびシニア会員のうち申し出があった者は、年会費を免除される。 賛助会員（法人）は1口 年 10,000 円とする。 賛助会員（個人）の年会費は 3,000 円とする。ネットによる連絡を希望する場合には 終身会費 10,000 円とする。 第14条 本会の会計年度は 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

## 編集後記

2017年1月10日に名古屋フルブライト・アソシエーション会報 The Fulbrighter in Nagoya No. 25&No. 26 の合本をお届けいたしましたが、今回は、1年後に単独号として、The Fulbrighter in Nagoya No. 27 としてお届けできることを喜んでおります。

なお目次にありますように、まず第1章は、加瀬豊司 (Toyoshi Kase, Ph.D.) 四国学院大学名誉教授 (1974-76) が書かれたエッセイ/ essay 「フルブライト顛末記：悲喜こもごも自分史の再想像」は加瀬先生がフルブライトにどのように応募し、アメリカでのワシントン州立大学院 (MA) とメリーランド大学大学院 (PhD) を取得されたかについて、若き日々の葛藤などのストーリーなどを渾身の想いで描いたものです。すべてのフルブライターが共感する内容であると思います。第2章、藤本博南山教授が「ヴェトナム戦争の時代」と向き合ってきたこととランプ政権発足後のアメリカの行方にも言及しながら―と称して、講演されたものです。ヴェトナム戦争研究の第1人者である藤本先生のライフワークの想いがここに凝縮されていると思われます。第3章は、川島正樹 (南山大学アメリカ研究センター長) 演題：日本人歴史家が英語で米国概説史を出版する試み――22年間の個人的苦闘の軌跡と新たな研究課題への挑戦と称して講演された内容です。川島先生が日本人アメリカ研究者として、アメリカ史の概説書 (公民権運動を中心) を出版するまでの経緯などを詳しく説明し、その葛藤を描いたものです。

この3つのエッセイと講演は、本来ならそれぞれが1冊の著書になるほどの内容が含まれているように思えるものでありますので、フルブライターの以外の皆さまにも読んでもらいたいと願っています。2017年7月15日の総会でも申し上げましたが、ニューズレターを会員数だけ印刷し、配布することは、会費だけで運営している本会には財政的に極めて困難であることと、広く社会に発信したいということで、下記に記載のホームページにこのニューズレターをPDFにして公開することにしております。このことについては、ホームページで一般の皆さまにも周知されるようにPRをしたいと思っております。すでに The Fulbrighter in Nagoya No. 25&No. 26 合本もPDFとしてホームページ公開しているはずでしたが、一人の著者がウェブ上での公開の許諾を下さらなかったもので、今回、一部修正して、同時に、ホームページにアップすることいたしました。

そのURLのアドレスは：<http://fbandewc-nagoya.jp/> です。是非ご閲覧してください。定期的に更新するつもりであります。よろしくお願いします。

(名古屋フルブライト・アソシエーション及び日本イースト・ウェストセンター中部同友会会長 塚田 守)

## 名古屋フルブライト・アソシエーション役員

### 会長・事務局

塚田 守（椋山女学園大学国際コミュニケーション学部 教授 1981-83）

### 副会長

木下 徹（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授 1989-91）

山本恵里子（在野研究者 1998 元椋山女学園大学教授）

### 幹事

上田慶一（三重教育文化会館 元相談役 1963-64）

藤本 博（南山大学外国語学部 教授 1977-80）

星野靖雄（筑波大学 名誉教授 1981-82, 1990-91）

Marc Bremer（南山大学経営学部 教授）

加瀬豊司（四国学院大学 名誉教授 1974-76）

伊原 正（鈴鹿医療科学大学 教授 1985-1990）

### 監事

小坂敦子（愛知大学法学部 准教授 1986）

川島正樹（南山大学外国語学部 教授 1995-1996）

発行年月	平成 30 年 1 月 20 日
発行	名古屋フルブライト・アソシエーション  〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町 17-3 椋山女学園大学国際コミュニケーション学部 電話：052-781-5143(直通) 電話：052-781-5291(伝言) Email: <a href="mailto:info@fbandewc-nagoya.jp">info@fbandewc-nagoya.jp</a> or <a href="mailto:mamoru@sugiyama-u.ac.jp">mamoru@sugiyama-u.ac.jp</a> URL: <a href="http://fbandewc-nagoya.jp/fb/">http://fbandewc-nagoya.jp/fb/</a>
印刷	ツゲ印刷株式会社 電話 052-621-2716

ISSN2188-0638